

索
引
篇

凡 例

本索引は群書類従本「東関紀行」に用いられているすべての語を検索する目的で編んだものである。

一、索引の構成

本索引は一般語彙、助詞・助動詞、および和歌索引からなる。

二、一般語彙について

1 見出し語

(イ) 見出し語は原則として単語単位としたが、句として示す方が適當と思われるものは《連語》あるいは《句》として示した。

(ロ) 語の配列は歴史的仮名づかいに統一し、五十音順とした。

(ハ) 見出し語には適宜（ ）内に漢字をあて、その下に《 》をつけて品詞名を記入した。品詞名は名詞は《名》、形容動詞は《形動》のように略符号を用いた。なお動詞だけは、活用の種類をも略符号で併記した。

(ニ) 訓み方によって、両様に訓みうる場合は、つとめて両様の見出し語を掲げた。ただその場合「はちぐわつーはづき」のようにして、いずれか一方を見るように示した。

(ホ) 活用形の表示は、未然形は囧、連用形は囧、終止形は囧、連体形は囧、已然形は囧、命令形は囧のような略符号を用いた。見出し語の所在は、本文の頁を漢数字で、行を③のようにして示した。例えば一頁の三行は、「一③」のようにした。又、計量的な調査の便を考慮して、一語は必ず一回だけ示すことにし、重ねて示すことは避ける方針をとった。但し掛詞や、複

合語などで二回示す必要がある場合は、いずれか一方を、（ ）にいれ、その語が二回示されている事がわかるようにした。歌中の語の場合は、例文の末尾に囧として示した。

(ハ) 例文は底本のままを記し、当該の語をゴシック体で示した。

2 単語の取り扱いについて

単語の認定は、なるべく普通の説に従ったが、特に注意すべきものは次のとおりである。

(イ) 接辞のついた語は原則としてそのついたものを単位としてかかげた(例えば「うちよす」の如く)。ただ「御」「ども」な

ど、いくつかはそのついでない見出し語の中で「御——」「——ども」のように小見出しによって示した。なおその場合「おん」「ども」の項に、それらのついた語をcf.として示した。

(四) 「給ふ」「奉る」などの敬讓語の補助動詞は、一般語彙に入れた。

(イ) 掛詞の一方は一方を普通に示し、他方はその所在を()に入れて示した。

(ロ) いわゆる完了の助動詞「り」の下接している四段活用語は命令形とした。

3 複合語について

認める限り複合語をたてる立場をとった。ただ複合語と認めた語でも、前項と後項の間に助詞が入っている場合は、これを分けた。例えば「茂り果つ」の複合語をたてたが、「茂りも果てで」などの場合は、「茂り」と「果つ」とに分けた。但しこのような場合「茂り果つ」の項にも、所在を()に入れて示した。

複合語を前項、後項の両方で重ねて示すことは、計量的調査の便を考慮してこれを避けた。しかし、例えば「出づ」を後項とする複合語に、「いぢぢぢぢぢぢ・思ひぢぢぢぢぢぢ」などがあることは「出づ」の項に、cf.として「うぢぢぢぢ——おもひぢぢぢぢ——さし——」のようにして示した。

4 その他

他の項を参照するとういと思われる場合は、cf.としてその項の存在を示した。

三、助詞・助動詞について

1 見出し語

(イ) 助詞と助動詞は区別せず五十音順に配列した。

(ロ) 語の所在の示し方は、一般語彙と同じである。ただし、歌とその他の区別は示さないことにした。

2 その他

その他一般語彙に準ずるものは特記しないで類推されたい。

四、和歌索引について

和歌索引は初句により五十音順に配列し、その所在を示した。

一
般
語
彙
索
引

あ

あか(闕伽)《名》

一六③風にさそはれうちかほりあかの花も露鮮なり

あかつき(暁)《名》

五⑧枕にちかきかねの声暁の空にをとづれて

二四⑥寝覚ともなき暁の空に出ぬ

三三⑭十月廿三日の曉すでに鎌倉をたちて

あかさか(赤坂)《名》

一一②みやち山こえ過るほどに赤坂と云宿あり

あかしくらす(明暮)《動四》

一②なすことなくして徒にあかしくらすのみにあり

らす

三〇③かくしつゝあかしくらすほどに

あがむ(崇)《動下二》

一め④ 三〇⑭仏神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた

あき(秋)《名》

一⑨仁治三年の秋八月十日あまりの比

七②荒にしのちはたゝ秋の風とよませ給へる歌

七⑦秋の最中の晴天清き河瀬にうつろひて

七⑬しらさりき秋の半の今宵しかもかゝる旅ねの月

をみるとは 闕

一六⑧秋の水みなぎり来て舟のさること速なれば

一八③南は野山にて秋の花露しげし

あきかせ(秋風)《名》

一八⑨去にし承久三年の秋の比

三二⑭むなしく過行て秋より冬にもなりぬ

五⑦まばらなるとこの秋かせ夜ふくるままに

五⑫都出ていくかもあらぬこよひたにかたしきわ

ひぬ床の秋風 闕

六⑦団雪の扇秋風にかくて暫忘れぬれば

あきぎり(秋霧)《名》

二③望月の比も漸近き空なれば秋ぎり立わたりて

あきもとのちゅうなごん(顕基中納言)《名》

二二②顕基中納言の口ずさみ給へりけん

あく(飽)《動四》

一か④ 一一④その縁一にあらねどもあかぬ別をおし

あく(上・拳)《動下二》

一げ④ 二五③冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり

三〇⑫義兵をあげて朝敵をなびかすより

cf. つみ

あけ(朱)《名》

八⑨夕日のかげたえだえさし入てあけの玉垣色を

かへたるに

あけほの(曙)《名》

三⑨曙の空になりてせたの長橋うち渡すほどに

あけゆく(明行)《動四》

一く④ 一〇⑥ほのくくと明行末は波路なりけり 闕

あさ(朝)《名》

一四⑦朝たつ雲の名残いづくよりも心ほそし

あさつゆ(朝露)《名》

四②東路の野ちの朝露けふやさは袂にかゝるはし

め成覽 國

五⑭下くさふかき朝つゆの霜にかはらん行すゑも

あざやかなり(鮮)《形動》

一なり四一六③風にさそはれうちかほりあかの花も露鮮なり

あし(葦)《名》

四⑦あしかつみなどおひわたれる中に

あした(朝)《名》

二五③冬の朝簾をあげて峯の雪を望けり

あしで(葦手)《名》

四⑧うちむれてとびちがふさまあしでをかけるや

うなり

あしのうみ(蘆海)《名》

二八⑨箱根の湖となづく又蘆の海といふもあり

二八⑭今よりは思ひ乱し蘆の海の深きめくみを神に

まかせて 國

あしかりをぶね(蘆刈小舟)《名》

二六③蘆かり小舟所々に棹さして

あすか(飛鳥)《名》

三③大和国飛鳥の岡本の宮より近江の志賀の郡に

あすかのかは(飛鳥川)《名》

四⑩かはりゆく世のならひ飛鳥の河の淵瀬にはか

ぎらざりけぬ

あそび(遊)《名》

一二⑧おほくの年の風月の遊びといふ御製を

あたらし(新)《形》

一しき困二三⑥ふるきをすててあたらしきにつくならひ

あたり(辺)《名》

二⑧此関のあたりを四宮河原と名付たり

二⑩いにしへのわらやの床のあたり迄心をとむる

相坂の関 國

五⑥むさ寺と云山寺のあたりにとまりぬ

八⑦神垣のあたりちかければやがてまいりて

一〇⑨そのあたりをみれどもかの草とおぼしき物は

なくて

二〇⑥みちより近きあたりなれば少打入てみるに

二二②此庵のあたりには殊更煙たてたるよすがもみ

えず

二二⑧此庵のあたり幾程遠からず

二五③今富士の山のあたりに宿をかる行客あり

あたる(当)《動四》

一り 國

八②けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる

九⑤長保のすゑにあたりて当国の守にて

三〇⑫さりにし治承のすゑにあたりて

三二⑨仏法東漸の砌にあたりて

cf. さしあたりて
あつた(熱田)《名》

九③ 剣は熱田にとまり給ふともいへり

あつたのみや(熱田宮)《名》

八⑦ 尾張国熱田の宮にいたりぬ

あづま(東)《名》

一⑩ 都を出て東へ赴く事あり

一八⑨ 罪ありて東へくだられけるに

二三⑦ 将門と云もの東にて謀反おこしたりけり

あづまち(東路)《名》

四② 東路の野ちの朝露けふやさは袂にかゝるはし

め成覧 園

二二⑨ 東路はこゝをせにせん宇津の山哀もふかし蕪

のした道 園

二三⑥ 東路のおもひ出ともなりぬべきわたり也

あつまる(集)《動四》

一① そこらの人あつまりて里もひゞくばかりに

あと(跡)《名》

三⑤ 此ほどはふるき皇居の跡ぞかしとおぼえて

三⑭ 漕行舟のあとのしら波誠にはかなく

三⑮ 世中を漕行舟によそへつゝなかめし跡を又そ

なかむる 園

九① この砌に跡をたれ給へりといへり

一二⑤ 召公去にし跡までも彼木を敬て敢てきらず

一三① 植置しぬしなき跡の柳はら猶その陰を人やた
のまん 園

一八⑦ 踏かよふ峯の梯とたえて雲にあとゝふ佐夜

の中山 園

一九③ かきつくるかたみも今はなかりけり跡は千年

と誰かいひ劍 園

二〇③ つたかえではしげりてむかしのあとたえず

二二④ 羊太傳が跡にはあらねども

三〇⑬ 隴山の跡をつぎて將軍のめしをえたり

おん——二二⑫ かくれさせ御座しける御跡を西行修行のついでに

cf. みづぐきの——

あとなし(跡無)《形》

一① 園 一八⑭ かたみさへあとなくなりける

あはず(合)《動下二》

cf. おもひ——

あはづのはら(粟津原)《名》

三② 打出の浜粟津の原なんどきけども

あはれ(哀)《名》

九⑬ うれへすゞろに催して哀かた／＼ふかし

一八⑤ 虫のうらみあはれふかし

一九⑩ 日数ふる旅のあはれは大井河わたらぬ水も深

き色かな 園

二二⑩ 東路はこゝをせにせん宇津の山哀もふかし蕪

のした道 國

三〇⑤海上の眺望哀を催して

あはれなり(哀)(形動)

―に 國

一④首は霜にいたりと書給へるあはれにおもひあはせらる

二⑭いかなりける御心のうちにかと哀に心ほそけれ

六⑭日影もみえぬ木の下道あはれに心ほそし

九⑦かきたるこそ哀に心ほそく聞ゆれ

一①家を出けるも哀に思ひいでられて過がたし

一八⑫いとあはれにて其家を尋るに

一九①はかなき世のならひいとあはれにかなしけれ

二一④いはねどしるくみえて中々あはれに心にくし

二二⑩さはこゝにて有けるよと哀に思ひあはせらる

二三①さしあたりてみるにはいと哀におほゆ

二三②あはれにも空にうかれし玉梓の道のへにしも

名をとゞめけり 國

―なり 國

三⑥ふるき皇居の跡ぞかしとおぼえてあはれなり

五⑨草の庵のねぎめもかくや有けむと哀なり

一①⑭かつくまづ道のしるべとなれるもあはれなり

り

二②④名だにも残らじとあはれ也

二③⑩泪をながしけると聞にもあはれなり

二九⑤滝のをとかなといへる思よられてあはれなり
三三⑤一行の雁がね空に消ゆくも哀なり

―なれ 國 一一①よめりけるこそおもひ出られてあはれなれ

あはれむ(憐)(動四)

―む 國 一二⑩人をはぐくみ物を憐むあまり

あひだ(間)(名)

一⑫鎌倉に下り着きし間或は山館野亭の夜のとまり

一三⑥今道と云かたに旅人おほくかゝる間いまはその宿は人の家居をさへ外にのみうつす

一四④其間に洲崎遠くさし出て

一五⑦其間に松たえど生渡りて

一七⑤しほ海湖の間に洲崎遠くへだたりて

あひにる(相似)(動上一)

―に 國 一七⑥名残りおほかりし橋本の宿にぞ相似たる

三三⑩よろこびは朱買臣にあひにたるこゝちす

あふ(合)(動四)

cf. すずみ ―ののしり ―ゆき ―より ―

あふ(敢)(動下二)

cf. きき ―とり ―

あふぎ(扇)(名)

六⑦班婕妤が団雪の扇秋風にかくて暫忘れぬれば
あふさか(逢坂)(名)

(二⑬)あまたゝひゆきあふ坂の開水にけふをかき

りの影そかなしき 𩇑

あふさかのせき(逢坂関)《名》

二②住家を出て相坂の関うち過るほどに

二⑩いにしへのわらやの床のあたり迄心をとむる

相坂の関 𩇑

あふみ(近江)《名》

三④岡本の宮より近江の志賀の郡に

あへて(敢)《副》

一二⑥彼木を敬て敢てきらす

あま(海士)《名》

一七④とゞまりたるほどあまの小舟に棹さしつゝ

二七⑩是そこのつりする海士の筈庇いとふありかや

袖にのこらん 𩇑

あまくだる(天降)《動四》

一る 𩇑 二八⑤せきかけし苗代水の流きて又あまくたる神そ

この神 𩇑

あまた(数多)《副》

一一⑪さゝ原の中にあまたふみわけたる道ありて

一四⑬君どもあまたみえし中に

二〇⑬庵を結つゝあまたの年月ををくるよし

二二⑨歌どもあまた書付たる中に

あまたたび(数多度)《副》

二⑬あまたゝひゆきあふ坂の関水にけふをかきり

の影そかなしき 𩇑

あまつをとめ(天津乙女)《名》

二五⑭ふしのねの風にたゝよふ白雲を天津乙女の袖

かとそみる 𩇑

あまねし(遍)《形》

一く 𩇑 二④あまねく又人の患をことほり

あまり(余)《名・副》

六⑤流出る清水余り涼しきまですみわたりて

二⑩物を憐むあまり道のほとりの往還の陰までも

cf. かななづきのはつか——とをか——はつか——は

づきとをか——

あみ(網)《名》

二七⑥或家にやどりたれば網つりなどいとなむ

あみだ(阿彌陀)《名》

三二⑦此阿彌陀は八丈の御長なれば

あみだぶつ(阿彌陀仏)《名》

二〇⑦画像の阿彌陀仏をかけ奉て

三一⑩由比の浦と云所に阿彌陀仏の大仏をつくり

あめ(雨)《名》

一五⑫草の庵のうちに雨露もたまらず

二八①炎旱の天よりあめにはかにふりて

二九⑧夕つかた雨俄にふりて

あやふし(危)《形》

一き 𩇑 一六⑫水の流おもひよせられていと危き心ちすれ

あやし(奇・怪)《形》

―し 園 一五〇塩かせ梢に音信又あやしの草の庵

二九〇あやしの賤が庵をかりて

あらいそ (荒磯) 《名》

二四〇くきが崎と云なるあらい磯の岩のはさまを

二四〇沖津風けさあらい磯の岩つたひ浪わけ衣ぬれ

くそ行く 歌

あらし (嵐) 《名》

二七嵐のかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける

一四〇松きびしく生つゞき嵐しきりにむせぶ

一七〇北には長松の嵐心をいたましむ

一七〇浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名残

をそきく 歌

一八〇北は深山にて松杉嵐はげしく

一九〇かれいるなど取出たるに嵐冷しく梢にひゞき

二〇〇是そこのたのむ木のもと岡へなる松の嵐に心

してふけ 歌

二一〇身を孤山の嵐の底にやどして

二七〇松の嵐木ぐらくをとづれて

三三〇松ふく峯のあらしのみぞいとゞはげしく

あらし (荒) 《形》

―い 園 二四〇沖津風けさあらい磯の岩つたひ浪わけ衣ぬ

れくそ行く 歌

あらし (争) 《動四》

―ふ 園 八〇ねぐらあらしそふ驚むらのかずもしらず

あらたなり (新) 《形動》

―に 園 三二〇白毫あらたにみがきて満月の光りをかゞや

す

―なる 園 三二〇道場のあらたなるをひらきしより

あらぬ (連体)

一一〇別路に茂りもはてゝ葛のはのいかてかあらぬ

かたに返りし 歌

あらはる (頭) 《動下二》

―れ 園 三〇湖はるかにあらはれてかの満誓沙弥が

三二〇沖の石村々塩干にあらはれて波に咽び

三二〇鳥悉たかくあらはれて半天の雲にいり

あらはれわたる (現渡) 《動四》

―れ 園 一〇〇海の面はるかにあらはれわたれり

あらひとかみ (現人神) 《名》

二八〇緑にかへりけるあら人神の御なごりなれば

あり (有・在) 《動・補助動ラ変》

―ら 園 一〇なすことなくして徒にあかしくらすのみにあ

らず

二〇わすれず忍ぶ人もあらばをのづから

五〇都出ていくかもあらぬこよひたにかたしきわ

ひぬ床の秋風 歌

一一〇その縁一にあらねどもあかぬ別をおしむ

一七〇是も心とまらずしもあらざらましなど

三二〇なべていまだ白妙にはあらず

一り囲

- 二六⑩をのづから神仙のすみかにもやあらん
- 三三⑩もとよりのぞむ処にあらねども
- 一⑧是即身は朝市にありて心は隠遁にある
- 二⑫東三条院石山にて詣て還御ありけるに
- 三④近江の志賀の郡に都うつりありて
- 五③猶おくさまにとふべき所ありてうち過ぬ
- 五⑤草の庵のねざめもかくや有けむと哀なり
- 八⑬はじめは出雲国に宮造ありけり
- 九④一条院の御時大江匡衡といふ博士有けり
- 一一③こゝにありける女ゆへに
- 一一⑫ふみわけたる道ありて行末もまよひぬべきに
- 一二⑨此こゝるにや有けんいみじくかたじけなし
- 一四②きゝわたりしかひありてけしきいと心すごし
- 一四③南には潮海あり漁舟波にうかぶ
- 一四③北には湖水有人家岸につらなれり
- 一五⑥白き真砂のみありて雪の積れるに似たり
- 一五⑫一とせ望むことありて鎌倉へくだる
- 一五⑬鎌倉へくだる筑紫人有けり
- 一八⑨聞えし人の罪ありて東へくだられるに
- 二〇⑫里にありて勤たるにまされるよし
- 二二⑦いかなることにかありけん
- 二二⑩さはこゝにて有けるよと哀に思ひあはせらる
- 二五③庵をしむる隠士あり冬の朝簾をあげて
- 二五④宿をかる行客ありさゆる夜衣をかたしきて

一り出

- 二五⑩白衣の美女二人ありて山の頂にならび舞と
- 二六⑧蓬萊の三の嶋のごとくに有けるによりて
- 二七⑧夜半の旅ねもかくやありけむとおぼゆ
- 三三⑧とみの事ありて都へかへるべきになりぬ
- 一⑩都を出て東へ赴く事あり
- 四⑩西東へ遥にながき堤あり
- 五⑭おいその杜と云杉むらあり
- 一一②みやぢ山こえ過るほどに赤坂と云宿あり
- 一三⑫参河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり
- 一四⑭さても此宿に一夜とまりたりしやどあり
- 一六⑦たのもしな入江に立るみをつくし深き験の有
と聞くにも 圖
- 一六⑧天竜と名付たるわたりあり
- 一八⑧猶過行ほどに菊川といふ所あり
- 一八⑬かの言のはものこらずと申ものあり
- 一九④いくほどもなく一村の里あり
- 二〇⑦わづかなる草の庵のうちに独の僧あり
- 二二①めにたつさまなる塚あり
- 二三⑭この関遠からぬほどに興津といふ浦あり
- 二六②西東へはるくとながき沼あり
- 二六⑬千本の松原といふ所あり
- 二七⑥車返しと云里あり
- 二八⑨又蘆の海といふもあり
- 三一⑬大仏をつくり奉るよししかたる人あり

—る困

三一⑭定光上人といふものあり

一⑧心は隠遁にあるいはれなり

一五⑧漁人釣客などの栖にやあるらん

二〇⑤無縁の世すて人あるよしをかけり

二一⑬我も又こゝをせにせんうつ山の分て色ある鶯
のした露 園

二五②心ありけるたび人のしわざにやあるらん

二八⑥かぎりある道なればこの砌をも立出て

—れ 園 三二⑧金銅木像のかはりめこそあれども

cf. しかはあれども・こころ—

ありあけ(有明)《名》

九⑪浜路におもむくほど有明の月かけふけて

ありか(在香)《名》

二七⑦夜のやどりありかことにして

二七⑩是そこのつりする海士の筈庇いとふありかや
袖にのこらん 園

袖にのこらん 園

ありがたし(有難)《形》

—く 園 一一⑥誠の道におもむきけんありがたくおぼゆ

三二⑨権化力をくはふるかとありがたくおぼゆ

—し 園 三三⑬まいりたればたふとくありがたし

ありさま(有様)《名》

一③おもひさだめありさまなれば

二⑤函谷の有様おもひいでらる

一七④棹さしつゝ浦の有さま見めぐれば

ありと(在処)《名》

三一⑥はじめて林池のありとにいたるまで

ありはらのなりひら(在原業平)《名》

一〇⑦在原業平かきつばたの歌よみたりけるに

ある《連体》

二⑧ある人の云蟬丸は延喜第四の宮にて

七⑪ある家の障子に書つくるついで

八⑫ある人のいはく此宮は素盞鳥尊なり

一三③うち過るにある者のいふをきけば

一八⑩命をうしなふとある家の柱にかゝれたりけり

二〇⑫まされるよしある人のをしへにつきて

二一⑭ある木陰に石をたかくつみあげて

二四⑭まちつけんとてある家に立入たるに

二七⑥或家にやどりたれば

ある(荒)《動下二》

—れ 園 一三⑨伏見の里ならねどもあれまくおしく覚ゆれ

—れ 園 三⑦さゝ波や大津の宮のあれしより名のみ残れる
しかのふる郷 園

四⑬行人もとまらぬ里となりしより荒のみまさる
のちの篠原 園

七②荒にしのちはたゞ秋の風

七②荒にしのちはたゞ秋の風

七②荒にしのちはたゞ秋の風

cf. くち—

あるいは(或)《接》

一⑬或は山館野亭の夜のとり

一⑬或は海辺水流の幽なる砌にいたるごとに
あれまさる(荒増)(動四)

一る困(四⑬) 行人もとまらぬ里となりしより荒のみまさる
のちの篠原 歌

あをし(青)(形)

一く困 四⑭兩山の影をひたさねども青くして滉瀟たり
一う箇⑤二五⑨白砂にはあらず青して天によれるすがた

い

いうぎん(幽吟)(名)

七⑩しばく幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ

いうし(遊子)(名)

二④遊子猶残月に行けん函谷の有様おもひいでら
る

いかで(如何)(副)

一⑧別路に茂りもはてゝ葛のはのいかでかあらぬ
かたに返りし 歌

いかなり(如何)(形動)

一なら困二⑩月の夜の望いかならんと床しくおぼゆ

一なり困 二⑭きこゆるこそいかなりける御心のうちにかと

哀に心ほそけれ

一なる困一三⑦いかなるゆへならんとおぼつかなし

一三⑩覚東ないさ豊河のかはる瀬をいかなる人のわ

たりそめけん 歌

二二⑦いかなることにかありけん
二五⑩いかなるゆへにかとおぼつかなし

いぎどほり(憤)(名)

二二⑦かたへの憤ふかくして

いくか(幾日)(名)

五⑩都出ていくかもあらぬこよひたにかたしきわ

ひぬ床の秋風 歌

いくばくならず(連語)

九⑦古郷にかへらんとする期いまだいくばくなら

ず

いくほど(幾程)(副)

一九④菊川をわたりていくほどもなく一村の里あり

二一⑧此庵のあたり幾程遠からず

いけ(池)(名)

四⑤南には池のおもて遠く見えわたる

いげ(以下)(名)

三一⑩代々の將軍以下つくりそへられたる松の社

いさ(感)

一三⑩覚東ないさ豊河のかはる瀬をいかなる人のわ

たりそめけん 歌

いざ(感)

五①鏡山いざたちよりてみてゆかむ 歌

いさゝか(副)

一七⑩いさゝかおもひつゞけられし

いざなふ(誘)《動四》

一 一〇 圃 三二 ⑬ やがていざなひてまいりたれば

いし(石)《名》

二二 ⑭ ある木陰に石をたかくつみあげて

二三 ⑮ 沖の石村々塩干にあらはれて波に晒び

いしやま(石山)《名》

二二 ⑯ 東三条院石山に詣て遷御ありけるに

いそ(磯)《名》

二三 ⑰ 磯の塩屋とくろく風にさそはれて

cf. あら—・おほ—

いそがはし(忙)《形》

一 一〇 圃 三〇 ① 鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし

いそぐ(急)《動四》

一 一〇 圃 六 ⑧ 立さらん事はものうくて更にいそがれず

一 一〇 圃 一〇 ① 古郷は日をへて遠くなるみかたいそぐ汐干の道そくるしき 圃

二四 ⑧ いそぐ塩干のつたひみち

二九 ⑨ いそぐ心にのみすゝめられて

三四 ② なれぬれは都を急ぐ今朝なれとさすかなこりのおしき宿哉 圃

いそへ(磯辺)《名》

二四 ① いそへによる波の音も身のうへにかゝるや

うに

二四 ③ 清見かた磯へに近きたひ枕かけぬ浪にも袖は

ぬれけり 圃

いたし(甚)《形》

一 一〇 圃 五 ⑩ 思ひつゞけられていといたう物がなし

いただき(頂)《名》

二五 ⑪ 白衣の美女二人ありて山の頂にならび舞と

いたづらなり(徒)《形動》

一 一〇 圃 八 ⑥ 花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならてかへる

家つと 圃

一 ② なすことなくして徒にあかしくらす

いたびさし(板庇)《名》

七 ① 萱屋の板庇年経にけり

いたむ(傷)《動四》

一 一〇 圃 七 ⑩ 幽吟を中秋三五夜の月にいたましめ

一 一〇 圃 一四 ⑥ 行人心をいたましめ

一 一〇 圃 一七 ⑥ 北には長松の嵐心をいたましむ

いたる(至)《動四》

一 一〇 圃 三 ⑭ このほどをも行過て野路と云所にいたりぬ

四 ⑭ 鏡の宿にいたりぬれば

八 ⑦ 尾張国熱田の宮にいたりぬ

二一 ⑧ 峠と云所にいたりて

二三 ⑧ 此関にいたりてとどまりけるが

二七 ⑫ 伊豆の国府にいたりぬれば

二八 ⑧ 山のなかにいたりて水うみ広くたゝへり

一 一〇 圃 一 ⑬ 海辺水流の幽なる砌にいたるごとに

一 一〇 圃 一 ⑬ 困

一二③つかさ人よりはじめてもろくの民にいたるまで

三一⑥楼台の荘厳よりはじめて林池のありとにいたるまで

いち(市)《名》

八②けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる

いちえふのふねのなかばんりのみ(一葉舟中万里身)《句》

二七①一葉の舟中万里身とつくれるに彼も是もはずれず

いちでうあん(一条院)《名》

九④一条院の御時大江匡衡といふ博士有けり

いちびと(市人)《名》

八⑤花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならてかへる家つと 歌

いつ(何時)《名》

一四⑨行とまる旅ねはいつもかはらねとわきて浜名の橋そ過うき 歌

一五⑩いつのころよりとはしらず

いづ(伊豆)《名》

二七⑫伊豆の国府にいたりぬれば

いづ(出)《動下二》

一⑩都を出て東へ赴く事あり

二②東山の辺なる住家を出て

五⑫都出ていくかもあらぬこよひたにかたしきわ

ひぬ床の秋風 歌

五⑬この宿をいでて笠原の野原うちとをるほどに

七⑨花洛を出て三日

一一②やはぎといふ所をいでて

一一③大江定基が家を出けるも

二四⑥寝覚ともなき曉の空に出ぬ

三〇⑨玉よする三浦かささきの波まより出たる月の影のさやけさ 歌

三三⑦かへるへき春をたのむの雁かねもなきてや旅の空に出にし 歌

cf. うち——おもひ——さし——たち——とり——

ながれ

いづく(何処)《名》

一四⑧朝たつ雲の名残いづくよりも心ぼそし

二〇④す行者にことづてしけん程はいづくなるらん

二六①浮嶋が原はいづくよりもまさりてみゆ

二七②眺望いづくにもまさりたり

いつくしみ(慈)《名》

三一③崇神のいつくしみ本社にかはらずと聞ゆ

いづこ(何処)《名》

一②さしていづこに住みはつべしとおもひまだめぬ

いつしか(何時)《副》

四①旅衣いつしか袖のしづくところせし

五⑦都にはいつしか引かへたるこゝちす
いっせう(一宵)《名》

七⑩花洛を出て三日株瀬川に宿して一宵

いっせんより(一千余里)《名》

一一⑩秦甸の一千余里を見わたしたらんこゝちして

いっせんり(二千里)《名》

七⑪かつく遠情を先途一千里の雲にをくるなど

いっへう(一瓢)《名》

一一①をのづから一瓢の器をかけたるといへり

いづものくに(出雲国)《名》

八⑬はじめは出雲国に宮造ありけり

いづれ(何)《名》

一四⑤松のひゞき波のをといづれときゝわきがたし

二六⑥こなたかなたの眺望いづれもとりゝくに心ほ

そし

いと《副》

五⑩思ひつゞけられていといたう物がなし

一四②きゝわたりしかひありてけしきいと心すごし

一五⑤錦花繡草のたぐひはいともみえず

一六⑫水の流おもひよせられていと危き心ちすれ

一八⑫いとあはれにて其家を尋るに

二三①さしあたりてみるにはいと哀におぼゆ

二四⑩打ながめられつゝいと心ぼそし

二六⑤雲の波煙の浪いとふかきながめなり

二九⑪うち過ぬるこそいと心ならずおぼゆれ
いとど《副》

七⑧旅のおもひいとをさへがたくおぼゆれば

一九①はかなき世のならひいとあはれにかなしけ

れ

二六⑩いとどおくゆかしくみゆ

三三③あらしのみぞいとどはげしくなりまされる

いとなむ(営)《動四》

一む困 二七⑥網つりなどいとなむ賤しきものすみかにや

いとふ(厭)《動四》

一ひ困 四⑭老をいとひてよみける歌の中に

一ふ困 二一⑥世をいとふ心のおくや濁らましかゝる山辺の

住居ならては 國

二七⑩はそのつりする海士の筈庇いとふありかや

袖にのころん 國

いなば(稻葉)《名》

一〇⑫花ゆへにおちし涙のかたみとや稻葉の露を残

しをくらん 國

二八②枯たる稻葉もたちまちに緑にかへりける

いにし(連体)

一八⑧去にし承久三年の秋の比

いにしへ(古)《名》

二⑩いにしへのわらやの床のあたり迄心をとむる

相坂の関 國

いぬ(寝)《動下二》

一 ね困 二四②夜もすがらいねられず

いね(稲)《名》

一〇⑩かの草とおぼしき物はなくていねのみぞおほくみゆる

いのる(祈)《動四》

一 ーり困 二八②うき身の行衛するべせさせ給へなどのりて
法施奉る

いのち(命)《名》

一八⑩東海道の菊川西岸に宿して命をうしなふ

いは(岩)《名》

二四⑥あら磯の岩のはざまを行過るほどに

いはく(曰)《連語》

二⑧ある人の云蟬丸は延喜第四の宮にて
八⑨ある人のいはく此宮は素盞烏尊なり

九①又いはく此宮の本体は草薙と号し奉る神剣也

いはがね(岩根)《名》

二八⑦岩がねたかくかさなりて

いはせ(岩瀬)《名》

一三⑩谷河のながれ落て岩瀬の波ことくしくきこゆ

二九③谷川みなぎりまさり岩瀬の波高くむせぶ

いはづたひ(岩伝)《連語》

一三⑭岩つたひ駒うち渡す谷川の音もたかしの山に

きにけり 歌

二四⑩沖津風けさあら磯の岩つたひ浪わけ衣ぬれ

くそ行 歌

いはね(岩根)《名》

六④陰くらき木のしたのいはねより流出る清水

いはれ(謂)《名》

一⑧身は朝市にありて心は隠遁にあるいはれなり

いふ(言・云)《動四》

一 是困

一 一 困

二一④いはねどしるくみえて中々あはれに心にくし
二⑤むかし蟬丸といひける世捨人
一三⑦さだまれることといひながら

一九③かきつくるかたみも今はなかりけり跡は千年
と誰かいひ劍 歌

二八⑩錢塘の水心寺ともいひつべし

三二⑧これも不思議といひつべし

八②けふは市の日になむあたりたるとぞいふなる

一三⑥外にのみうつすなどぞいふなる

一六②人多くまいるなんどぞいふなる

一九④こはまとぞいふなる

二四⑥くきが崎と云なるあら磯の岩のはざまを

三⑭野路と云所にいたりぬ

四④しの原と云所をみれば

五⑥むさ寺と云山寺のあたりにとまりぬ

五⑩おいその杜と云杉むらあり

一 是困

六⑬かしは原と云所をたちて
七⑭くみぜ川と云所にとまりて
九⑮大江匡衡といふ博士有けり

一一⑯やはぎといふ所をいでて

一二⑰赤坂と云宿あり

一三⑱成王の三公として燕と云国をつかさどりき

一四⑲風月の遊びといふ御製をたまはせたりけるも

一五⑳豊河と云宿の前をうち過るに

一六㉑ある者のいふをきけば

一七㉒わたふ津の今道と云かたに旅人おほくかゝる

問

一三⑬境川とぞ云

一四⑭橋本と云所に行つきぬれば

一五⑮とまるたぐひ夢をさまざまといふ事なし

一六⑯猶過行ほどに菊川といふ所あり

一七⑰すながしといふ物をしたるにたり

一八⑱峠と云所にいたりて

一九⑲駿河国きかはといふ所にてうたれにけり

二〇⑳かの志戸と云処にてかくれさせ御座しける

二一㉑将門と云もの東にて謀反おこしたりけり

二二㉒清原滋藤といふ者

二三㉓軍監と云つかさにて行けるが

二四㉔よる山をすぐと云唐の歌を詠じければ

二三⑭この関遠からぬほどに興津といふ浦あり

二四⑮神原といふ宿のまへをうちとをるほどに

二五⑯ふしのしら雲といふ歌なり

二六⑰千本の松原といふ所あり

二七⑱車返しと云里あり

二八⑲又蘆の海といふもあり

二九⑳湯本と云所にとまりたれば

三〇㉑ながしのいりとかやいふ所に

三一⑳由比の浦と云所に

三二㉒定光上人といふものあり

一八〇

一①鬢の霜漸冷しといへども

一八〇

二②二の道ともにかけてたりといへども

三③四宮河原と名付たりといへり

四④老やしぬるといへるは

五⑤八雲たつといへる大言葉も

六⑥この砌に跡をたれ給へりといへり

七⑦剣は熱田にとまり給ふともいへり

八⑧弘誓のふかき事うみのごとしといへるも

九⑨一瓢の器をかけたるといへり

一〇⑩年々に春の草のみ生たりといへる詩

一一⑪涙もよほす滝のをとかなといへる

cf. いはく
いへ(家)《名》

七⑩ある家の障子に書つくるついでに

一一③大江定基が家を出けるも

一八⑩ある家の柱にかゝれたりけり

一八⑫いとあはれにて其家を尋るに

二三⑭海に向ひたる家にとどりて侍れば

二四⑭ある家に立入たるに

二七⑥或家にとどりたれば

いへつと(家苞)《名》

八③往還のたぐひ手毎にむなしからぬ家つとも

八⑥花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならてかへる

家つと 鬨

いへる(家居)《名》

四⑩家居もまばらに成行など聞こそ

一三⑤人の家居をさへ外にのみうつすなどぞいふな

る

いほ(庵)《名》

二五①旅衣すそのの庵のさむしろにつもるもしるま

ふしのしら雪 鬨

いほり(庵)《名》

一⑥みやまのおくの柴の庵までも

二〇⑬此山に庵を結つゝあまたの年月ををくる

二一①此庵のあたりには

二一⑧此庵のあたり幾程遠からず

二五②昔香炉峯の麓に庵をしむる隠士あり

二九⑬あやしの賤が庵をかりてとゞまりぬ

cf. くさの

いま(今)《名・副》

四⑨今はうちすぐるたぐひのみ多くして

一三⑤いまはその宿は人の家居をさへ外にのみうつ

す

一七⑬ゆふたすきかけてそ頼む今思ふことのまゝなる神のしるしを 鬨

一八⑩今は東海道の菊川西岸に宿して

二五③今富士の山のとりに宿をかる行客あり

二八⑭今よりは思ひ乱し蘆の海の深きめくみを神に

まかせて 鬨

三〇⑭あがめ奉るよりこのかた今繁昌の地となれり

いまさら(今更)《副》

一三⑧里人の今更あうかれんこそ

いまずく(今宿)《名》

一九⑫岡部のいまずくをうち過るほど

いまだ(未)《副》

三②いまだ夜のうちなれば

六②余熱いまだつきざる程なれば

九⑦古郷にかへらんとする期いまだいくばくなら

ず

一一⑬柳もいまだ陰とたのむまではなけれども

二五⑨なべていまだ白砂にはあらず
 いまのうら (名)

一七⑩遠江の国府いまの浦につきぬ

一七⑨浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名残
 をそきく 歌

いまは (副)

一八⑬今は限とてのこし置けむかたみさへ

一九②かきつくるかたみも今はなかりけり跡は千年
 と誰かいひ劍 歌

いまみち (今道) (名)

二三④近比より俄にわたふ津の今道と云かたに

いみじ (形)

一七⑩此こゝろにや有けんいみじくかたじけなし

いやし (卑・賤) (形)

一七⑩いやしきことの葉をのこさんも中中におぼえ
 て

二七⑥網つりなどいとなむ賤しきものすみかにかや

三二①関東のたかきいやしきをすすめて

いよいよ (愈々) (副)

一八②みるにいよく心ぼそし

三一①松栢のみどりいよくしげく

いよのかみ (伊予守) (名)

二七⑭能因入道伊予守実綱が命によりて

いよのくに (伊予国) (名)

二七⑬此社は伊予の国三嶋大明神をうつし奉る
 いらか (覺) (名)

三一⑤鳳の薨日にかゞやき

いり (不詳)

二九⑫ながしのいりとかやいふ所に

いりえ (入江) (名)

一六⑥たのもしな入江に立るみをつくし深き験の有
 と聞にも 歌

二六⑩影ひたす沼の入えにふしのねの煙も雲も浮嶋
 がはら 歌

いりちがふ (入達) (動四)

一ひ圃 四⑦洲崎所々に入ちがひて

一九⑦川瀬どもとかく入ちがひたる様にて

いる (入) (動四)

一り圃 二〇⑭むかし叔斎が首陽の雲に入て猶三春の厭をと
 り

三二③鳥悉たかくあらはれて半天の雲にいり

三三①李陵が胡にいりし三千里のみちの思ひ

cf. うち——さし——たち——わけ——

いろ (色) (名)

四⑥波の色もひとつになり

八⑨あけの玉垣色をかへたるに

一五③言のはの深き情は軒端もる月のかつらの色に
 みえにき 歌

一九⑩日数ふる旅のあはれは大井河わたらぬ水も深
き色かな 國

二二⑬我も又こゝをせにせんうつ山の分て色ある薫
のした露 國

いろか(色香)《名》

八⑤花ならぬ色香もしらぬ市人の徒ならてかへる
家つと 國

いんし(隠士)《名》

二五③昔香爐峯の麓に庵をしむる隠士あり

いんとん(隱遁)《名》

一⑧心は隱遁にあるいはれなり

う

う(得)《動下二》

一え困 二二⑥武勇三略の名を得たり

三〇⑬將軍のめしをえたり

うかぶ(浮)《動四》

一ひ困 二六⑧此原昔は海の上につかびて

一ふ田 一四③漁舟波にうかぶ

うかる(浮)《動下二》

一れ困 二三②あはれにも空にうかれし玉粹の 國

cf. む——

うきぐも(浮雲)《名》

一③彼白楽天の身は浮雲に似たり

うきしま(浮嶋)《名》

二六⑨蓬萊の三の嶋のごとくに有けるによりて浮嶋
となん名付たり

うきしまがはら(浮嶋原)《名》

二六①浮嶋が原はいづくよりもまさりてみゆ

二六⑫煙も雲も浮嶋かはら 國

うく(浮)《動四》

一き困 二六⑫煙も雲も浮嶋かはら 國

一け困 二七①木のはのうけるやうにみゆ

うく(受)《動下二》

一け困 三〇⑩水の尾の御門の九の世のはつえをたけき人に
うけたり

うけたまはる(承)《動四》

一る困 二二⑭よめりけるなどうけ給はるに

うし(憂)《形》

一き困 二八⑫うき身の行衛しるべせさせ給へなど

cf. すぎ——もの——

うしつ(烏瑟)《名》

三二②烏瑟たかくあらはれて半天の雲にいり

うしなふ(失)《動四》

一は困 一二④そのもとをうしなはず

一ふ田 一八⑪命をうしなふと

うしろ(後)《名》

二九⑭うしろは山ちかくして窓にのぞむ

うすし(薄)(形)

—き 困 一九⑭うすき袂もさむくおぼゆ

うた(歌)(名)

三⑩此海を望つゝよめりけん歌おもひ出られて
五①老をいとひてよみける歌の中に

七③秋の風とよませ給へる歌おもひ出られて

一〇⑧在原業平かきつばたの歌よみたりけるに

一〇⑭とまりける女のもとにつかはしける歌に

一二⑥うたをなんつくりけり

一八①古今集の歌によこほりふせるとよまれたれば

二三⑩唐の歌を詠じければ

二五①つもるもしるきふしのしら雪といふ歌なり

二八①能因入道伊予守実綱が命によりて歌よみて

二九④かの源氏物がたりの歌に涙もよほす滝のをと

かなといへる

おん—— 二⑬よませ給ひける御歌

——ども二⑨歌どもあまた書付たる中に

うだいしゃうけ(右大將家)(名)

お こ——

うち(内)(名)

二⑫いかなりける御心のうちにかと哀に心ほそけ
れ

三③いまだ夜のうちなれば

一〇②やがて夜のうちに二村山にかかりて

一五⑩かりそめなる草の庵のうちに

一五⑭心のうちに申置て侍りけり

二〇⑦わづかなる草の庵のうちに独の僧あり

三三⑨其ころのうち水々きのあとにもかきながし

がたし

うちいづ(打出)(動下二)

—で 困 一一⑨ほむの川原にうち出たれば

一五④此宿をもうち出て行過るほどに

二五⑧田子の浦にうち出てふじの高ねを見れば

うちいる(打入)(動四)

—り 困 二〇⑥みちより近きあたりなれば少打入てみるに

うちえいず(打詠)(動サ変)

—じ 困 一四⑭忍びやかにうち詠じたりしこそ

うちかをる(打薫)(動四)

—り 困 一六③不断香の煙風にさそはれうちかほり

うちしぐる(打時雨)(動下二)

—れ 困 二九③太山おろしはげしくうちしぐれて

うちすぐ(打過)(動上二)

—き 困 五③猶おくさまにとふべき所ありてうち過ぬ

七④爰をばむなしくうち過ぬ

二九⑩見とゞむるひまもなくてうち過ぬるこそ

—ぐる 困 二②相坂の関うち過るほどに

四⑨今はうちすぐるたぐひのみ多くして

一三③豊河と云宿の前をうち過るに

一九⑫ 函部のいますくをうち過るほど
 二一⑭ 猶うちすぐるほどに

うちつる (打連) 《動下二》

一 一れ 圃 一五⑨ うちつれたる旅人のかたるをきけば

うちでのほま (打出浜) 《名》

三② 打出の浜粟津の原などきけども

うちとほる (打通) 《動四》

一 一る 圃 五⑬ この宿をいでて笠原の野原うちとをるほどに

二四⑬ 神原といふ宿のまへをうちとをるほどに

うちながむ (打眺) 《動下二》

一 一め 圃 二四⑨ 打ながめられつゝいと心ほそし

うちのほる (打上) 《動四》

一 一る 圃 一九⑤ すこしうちのほるやうなる奥より

うちむる (打群) 《動下二》

一 一れ 圃 四⑧ をしかものうちむれてとびちがふさま

うちよす (打寄) 《動下二》

一 一する 圃 二四⑦ 沖津風はげしきにうちよする波も

うちわたす (打渡) 《動四》

一 一す 圃 三⑨ せたの長橋うち渡すほどに

一三⑭ 岩つたひ駒うち渡す谷川の 圃

うちをがむ (打拜) 《動四》

一 一み 圃 二七⑬ 三嶋の社のみしめうちおがみ奉るに

うつ (打) 《動四》

一 一た 圃 二二⑩ 駿河国きかはといふ所にてうたれにけり

うつす (移) 《動四》

一 一し 圃 二七⑭ 三嶋大明神をうつし奉ると聞にも

一 一す 圃 一三⑥ 人の家居をさへ外にのみうつすなどぞいふな

る

うつのやま (宇津山) 《名》

二〇③ 宇津の山をこゆれば

二二⑩ 東路はこゝをせにせん宇津の山 圃

二二⑫ 我も又こゝをせにせんうつの山 圃

うつは (器) 《名》

二二① をのづから一瓢の器をかけたなりといへり

うつる (移) 《動四》

一 一る 圃 六① はかなく移る月日なれば

一八④ 谷より嶺にうつるみち雲に分入心地して

うつるふ (映) 《動四》

一 一ひ 圃 七⑦ 秋の最中の晴天清き河瀬にうつるひて

うへ (上) 《名》

七③ 此うへは風情もめぐらしがたければ

一〇⑧ みな人かれないのうへに

二〇⑩ さしておもひはなれたる道心も侍らぬうへ

二四① いそべによする波の音も身のうへにかゝるや

うにおぼえて

二六⑧ 此原昔は海の上にかかびて

二七⑤ みとりにつゝく波のうへ哉 圃

三〇④ 鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし

うみ(海)《名》

一三⑩かの満誓沙弥が比叡山にて此海を望つゝ
 一〇③東漸しらみて海の面はるかにあらはれわたれ

り

一五⑤西は海の渚近し

一六④弘誓のふかき事うみのごとし

二三⑭海に向ひたる家にやどりて侍れば

二六④南は海のおもて遠くみわたされて

二六⑧此原昔は海の上にかかびて

二六⑬海の渚遠からず

cf. あしの——しほ——

うやまふ(敬)《動四》

—ひ囲 一二⑥彼木を敬て敢てきらず

うら(浦)《名》

一七④浦の有さま見めぐれば

二三⑭この関遠からぬほどに興津といふ浦あり

cf. いまの——うら——たごの——ゆひの——

うらうら(浦々)《名》

三〇④三浦のみさきなどいふ浦々を行てみれば

三〇⑥さひしきは過こしかたの浦々も 𠮟

うらかぜ(浦風)《名》

二六⑦浦かぜ松の梢にむせぶ

うらみ(恨)《名》

一八⑤虫のうらみあはれふかし

うるほす(溼)《動四》

—し囲 一七⑤南には極浦の波袖を溼し北には長松の嵐心を

いたましむ

うれし(嬉)《形》

—しき困二八⑩うれしき便なれば

うれへ(愁・患)《名》

九⑫旅の空のうれへすぐるに催して

一二④あまねく又人の患をこはり

三三①蘇武が漢を別し十九年の旅の愁

うゑおく(植置)《動四》

—か困 一一⑬古武蔵の前司道のたよりの輩に仰て植をかれ

たる

—き囲 一二⑪思ひよりて植をかれたる柳なれば

一三①植置しぬしなき跡の柳はら 𠮟

え

え(江)《名》

一⑩山かさなり江かさなりて

cf. いらり——

えい(詠)《名》

一二⑧州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも

えいくわん(管館)《名》

三〇⑬管館をこの所にしめ

えいず(詠)《動サ変》

一七 團 二⑥大和歌を詠じておもひを述けり

二三 ⑩唐の歌を詠じければ

cf. うちー

えいすい (瀧水) (名)

二二 ①許由が瀧水の月にすみし

えきろ (駅路) (名)

二三 ⑩駅路の鈴の聲はよる山をすぐと云唐の歌を

えのしま (江嶋) (名)

二九 ⑨大磯江嶋もろこしが原など聞ゆる所々

えびす (夷) (名)

九 ②夷をたいらげて帰り給ふ時

えん (縁) (名)

一一 ④人の発心する道その縁一にあらねども

えん (燕) (名)

一一 ①成王の三公として燕と云唐を

えんおう (延応) (名)

三二 ①過にし延応の比より

えんかん (炎旱) (名)

二八 ①炎旱の天よりあめにはかにふりて

えんぎ (延喜) (名)

二 ⑨蟬丸は延喜第四の宮にておはしけるゆへに

お

おい (老) (名)

四 ⑭老をいとひてよみける歌の中に

おいそのもり (老蘇森) (名)

五 ⑬おいその杜と云杉むらあり

六 ⑬名にしおいその杜の下草 園

おき (沖) (名)

二三 ④沖の石村々塩干にあらはれて

二六 ⑭沖には舟ども行ちがひて

三〇 ⑦ひとつなかめの沖のつり舟 園

おきつ (興津) (名)

二三 ⑭この関遠からぬほどに興津といふ浦あり

おきつかぜ (沖津風) (名)

二四 ⑦沖津風はげしきにうちよする波も

二四 ⑪沖津風けさあら磯の岩つたひ 園

おきな (翁) (名)

四 ⑭昔なゝの翁のよりあひつゝ

五 ⑤たちよりてけふは過なん鏡山しらぬ翁のかけ

はみすとも 園

おく (奥) (名)

一 ⑥みやまのおくの柴の庵までも

一九 ⑤うちのぼるやうなる奥より大井川を見渡した

れば

二二 ⑥世をいとふ心のおくや濁らまし 園

おく (置) (動四)

一 ⑥ 六 ②かはらしな我もとゆひに置箱も 園

cf. うゑ——かき——きき——たむけ——とどめ

——のこし——まうし——

おくさま(奥様)《名》

五③猶おくさまにとふべき所ありて

おくゆかし《形》

——しく困二六⑩いとどおくゆかしくみゆ

おくる(送)《動四》

——る困 七⑩先途一千里の雲にをくるなど

——る困 一五⑫年月を送るほどに

二〇⑬あまたの年月ををくるよしをこたふ

おくる(後)《動下二》

——れ困 二四⑬をくれたる者まちつけんとて

おこす(起)《動四》

——し困 二③⑦将門と云もの東にて謀反おこしたりけり

おこたる(怠)《動四》

——ら困 三二②四季の御かぐらをこたらず職掌に仰せて

おこなふ(行)《動四》

——は困 三二③八月の放生会ををこなはる

——ふ困 一一②政ををこなふ時

おこり(起)《名》

三二⑭事のおこりをたづぬるに

おこる(橋)《動四》

——り困 二二⑥かの梶原は將軍二代の恩に憐り武勇三略の名

を得たり

おさへがたし(抑難)《形》

——く困 七⑨旅のおもひいとゞをさへがたくおぼゆれば

おつ(落)《動上二》

——ち困 一〇⑪花ゆへにおちし涙のかたみとや

一三⑬谷河のながれ落て岩瀬の波ことゞしくきこ

ゆ

おと(音)《名》

六④音にきくしさが井を見れば

一四①音もたかしの山にきにけり

一四⑤松のひゞき波のをといづれときくわきがたし

一七⑨浪の音も松の嵐もいまの浦に昨日の里の名残

をそきく

二四①いそべによする波の音も身のうへにかゝるや

うにおぼえて

二九⑤涙もよほす滝のをとかなといへる

二九⑦夢路ゆるさぬ滝の音哉

おとつと(弟)《名》

一一①もろこしの召公夷は周の武王の弟也

おとす(落)《動四》

——し困 一〇⑧なみだおとしける所よと

——す困 二二⑤心ある旅人はこゝにもなみだをやおとすらむ

おとつる(訪)《動下二》

——れ困 二④木綿付鳥かすかにをとつれて

五⑧枕にちかきかねの声曉の空にをとつれて

六⑭谷川霧の底に音信山風松の梢に時雨わたりて
 一五⑦塩かぜ梢に音信又あやしの草の庵所々みゆる
 二七⑬松の嵐木ぐらくをとづれて

おとづれわたる(訪渡)(動四)

一れ囿 九⑫友なし千鳥ときぐをとづれわたれる

おとなぶ(大人)(動上二)

一ひ囿 一四⑬すこしおとなびたるけはひにて

おとる(劣)(動四)

一ら困 三〇⑤面白き所々にもをとらずおぼゆ

おどろく(驚)(動四)

一か困 二八⑩唐家驪山宮かとおどろかれ

おのづから(副)

二①をのづから後のかたみにもなれとてなり

一六⑩ふねなどもをのづからくつがへりて

二一①をのづから一瓢の器をかけたり

二六⑨をのづから神仙のすみかにもやあらん

三一⑥月をのづから祇宗の観をとぶらひ

おはします(御座)(動四)

一し囿 一二⑦後三条天皇東宮にておはしましけるに

二二⑫かの志戸と云処にてかくれさせ御座しける

一す囿 一五⑩此原に木像の観音おはします

一七⑪ことごのまくと聞ゆる社おはします

おはず(御座)(動サ変)

一し囿 二⑧第四の宮にておはしけるゆへに

おひつづく(生統)(動四)

一き囿 一四④松きびしく生つゞき嵐しきりにむせぶ

おひわたる(生渡)(動四)

一り囿 一五⑦其間に松たえぐ生渡りて

二六⑭松はるかに生わたりて

一れ囿 四⑦あしかつみなどおひわたれる中に

おふ(負)(動四)

一ひ囿(六③)名にしおいその杜の下草 國

おふ(追)(動四)

一ひ囿 一二⑩かの前の司も此召公の跡を追て人をはぐくみ
 物を憐むあまり

おふ(生)(動上二)

一ひ囿 二二③年々に春の草のみ生たり

おほいそ(大磯)(名)

二九⑨大磯江嶋もろこしが原など

おほえのさだもと(大江定基)(名)

一一③大江定基が家を出けるも

おほえのまさひら(大江匡衡)(名)

九④一条院の御時大江匡衡といふ博士有けり

おほきなり(大)(形動)

一なる囿 二一⑥おほきなる卒都婆の年経にける

おほし(多)(形)

一かり囿 一七⑥名残おほかりし橋本の宿にぞ相似たる

一く囿 四⑩今はうちずぐるたぐひのみ多くして

六⑥往還の旅人多く立よりて

一〇⑩いねのみぞおほくみゆる

一二⑧おほくの年の風月の遊びといふ御製をたまは
せたりけるも

一三⑤わたふ津の今道と云かたに旅人おほくかゝる

間

一五④なごりおほくおほえながら

一六②人多くまいるなんどぞいふなる

二六④むれたる鳥おほくさはぎたり

一かり四 一六⑩底のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ

一し四 三二⑩松の社蓬の寺まぢまぢにこれおほし

一い箇四(一九⑩)日数ふる旅のあはれは大井河 鬨

おほし(覚・思)(形)

一しき四 一〇⑨かの草とおほしき物はなくて

一六④願書とおほしき物

おほす(仰)(動下二)

一せ四 一一⑬古武蔵の前司道のたよりの輩に仰て植をかれ

たる柳

三二②職掌に仰て八月の放生会ををこなはる

おほつかなし(覚束無)(形)

おほつかなし 一三⑩覚束ないさ豊河のかはる瀬を

一し四 一三⑦いかなるゆへならんとおほつかなし

二五⑩いかなるゆへにかとおほつかなし

おほつのみや(大津宮)(名)

三④大津の宮をつくられけり

三⑦さゝ波や大津の宮のあれしより

おほみだう(大御堂)(名)

三一⑦大御堂ときこゆるは

おほゆ(覚)(動下二)

一え四

三⑤皇居の跡ぞかしとおほえて

五②此山の事にやとおほえて

五⑨宿もからまほしく覚えけれども

七④いやしきことの葉をのこさんも中々におほえ

て

一五①うち詠じたりしこそ心にくくおほえしか

一五④なごりおほくおほえながら

一六⑤たのもしくおほえて

一七⑦あらざらましなどはおほえて

一ゆ四

二四①身のうへにかゝるやうにおほえて

四⑩飛鳥の河の淵瀬にはかざらざりけめとおほゆ

六①はかなく移る月日なれば遠からずおほゆ

八④やうかはりておほゆ

一一⑥ありがたくおほゆ

一一⑪月の夜の望いかならんと床しくおほゆ

一九④うすき袂もさむくおほゆ

二三①さしあたりてみるにはいと哀におほゆ

二五⑤かれもこれもともに心すみておほゆ

二七⑨かくやありけむとおほゆ

二八③ゆふだすきかけまくもかしこくおほゆ

三〇⑤面白き所々にもをとらずおほゆ

三二⑩権化力をくはふるかとありがたくおほゆ

―ゆれ目 七⑨旅のおもひいとゞをさへがたくおほゆれば

一二⑭その本意はさだめてたがはじとこそおほゆれ

一三⑨今更あうかれんこそかの伏見の里ならねども

あれまくおしく覚ゆれ

一九⑧よそめおもしろくおほゆれば

二一⑪心とまりておほゆれば

二九⑪ひまもなくてうち過ぬるこそいと心ならずおほゆれ

ほゆれ

おほるがは (大井川) (名)

一九⑤大井川を見渡したれば

一九⑩日数ふる旅のあはれは大井河わたらぬ水も深き色かな 歌

おもし (重) (形)

―き困 一二④おもしき罪をもなだめけり

おもしろし (面白) (形)

―く困 一九⑧よそめおもしろくおほゆれば

―き困 三〇⑤こしかたに名高く面白き所々にもをとらず

おもて (面) (名)

四⑤南には池のおもて遠く見えわたる

一〇③海の面はるかにあらはれわたれり

二六④南は海のおもて遠くみわたされて

おもはぬほか (連語)

三三⑬おもはぬほかの錦をやきむ 歌

おもはぬほかに (連語)

一⑨かゝるほどにおもはぬ外に……東へ赴く事あり

おもひ (思) (名)

二⑦大和歌を詠じておもひを述けり

七⑧旅のおもひいとゞおさへがたく

三三①李陵が胡にいりし三千里のみの思ひ身にしらるる心ちす

おもひあはず (思合) (動下)

―せ困 一④あはれにおもひあはせらる

二②⑪哀に思ひあはせらる

おもひいづ (思出) (動下)

―で困 二⑤函谷の有様おもひいでらる

三⑩よめりけん歌おもひ出られて

七③よませ給へる歌おもひ出られて

一〇⑨なみだおとしける所よとおもひ出られて

一一①思ひわたらんとよめりけるこそおもひ出られてあはれなれ

一一③哀に思ひいでられて過がたし

二②③といへる詩思ひいでられて

おもひさだむ (思定) (動下)

―め困 一③住はつべしともおもひさだめありさまなれ

おもひたゆ(思絶)(動下二)

一え困 二一③柴折くぶるなくさめまでも思ひたえたるさま

おもひつづく(思続)(動下二)

一け困 五⑤思ひつゞけられていたう物がなし

一七⑬いさゝかおもひつゞけられし

おもひで(思出)(名)

九⑨思ひ出のなくてや人のかへらまし 歌

二三⑥東路のおもひ出ともなりぬべき

おもひはなる(思離)(動下二)

一れ困 二〇⑨さしておもひはなれたる道心も

おもひみだる(思乱)(動下二)

一れ困 二八⑭今よりは思ひ乱し蘆の海の 歌

おもひやすらふ(思休)(動四)

一ふ困 一⑥しばらく思ひやすらふ程なれば

おもひやる(思遣)(動四)

一ら困 七⑧古人の心遠く思ひやられて

一り困 二五⑦高ねの雪を思ひやりけん 歌

おもひよす(思寄)(動下二)

一せ困 一六⑫彼巫峡の水の流おもひよせられて

おもひよる(思寄)(動四)

一ら困 二九⑤涙もよほす滝のをとかなといへる思ひよられ

てあはれなり

一り困 一二⑭往還の陰までも思ひよりて植をかれたる柳な

おもひわたる(思渡)(動四)

一ら困 一〇⑭恋しとのみや思ひわたらん 歌

おもふ(思)(動四)

一は困 二四⑨かけてもおもはざりし旅の空ぞかし

一ひ困 二二⑨ひとまどものびんとやおもひけむ

三二⑭帰るべきほどとおもひしもむなく通行て

一ふ困 一六⑬しづかなる流ぞかしとおもふにも

一七⑬今思ふことのまゝなる神のしるしを 歌

一へ困 二五④さゆる夜衣かたしきて山の雪をおもへる

おもむく(赴)(動四)

一か困 二二⑭讃岐の法皇配所へおもむかせ給ひて

一き困 一一⑤誠の道におもむきけんありがたくおぼゆ

一く困 一⑩都を出て東へ赴く事あり

九⑩浜路におもむくほど

一二⑦学士実政任国に赴く時

三三⑭すでに鎌倉をたちて都へおもむくに

おゆ(老)(動上二)

一い困 五②年へぬる身は老やしぬる 歌

およぶ(及)(動四)

一ば困 二二⑭しもさまのものの事は申にをよばねども

一ぶ困 三三②その功すでに三か二にをよぶ

おる(下・降)(動上二)

cf. こえ——

おろし(下)《名》

cf. みやま

おん・おぼん(御)《接頭》

cf. — あと・—うた・—ところ・—たけ・—とき

—なごり・—まへ・み

おん(恩)《名》

二二⑥かの梶原は將軍二代の恩に橋り

おんしょう(恩賞)《名》

三〇⑫恩賞しきりに隴山の跡をつぎて將軍のめしを

えたり

か

かいじょう(海上)《名》

三〇④海上の眺望哀を催して

かいへんすいりう(海辺水流)《名》

一⑬或は海辺水流の幽なる砌にいたるごとに

かうかく(行客)《名》

二五④今富士の山にあたりに宿をかる行客あり

かうじん(行人)《名》

二九⑬行人征馬すだれのもとにゆきちがひ

がうす(号)《動サ変》

—し 圃 九②此宮の本体は草薙と号し奉る神剣也

かうろほう(香爐峯)《名》

二五②昔香爐峯の麓に庵をしむる隠士あり

かがみのしゆく(鏡宿)《名》

四⑭鏡の宿にいたりぬれば昔な々の翁のよりあひ

つゝ

かがみやま(鏡山)《名》

五①鏡山いさたちよりみてゆかむ年へぬる身は

圃

かがやかす(赫)《動四》

—す 圃 三二③白毫あらたにみがきて満月の光りをかゞやか

す

かがやく(揮)《動四》

—き 圃 三一⑤鳳の晝日にかゞやき覺の鐘霜にひゞき

かかり(斯有)《動ラ変》

—ら 圃 二二⑬昔の玉の床とてもかゝらむのちは 圃

—る 圃 一⑧かゝるほどにおもはぬ外に仁治三年の秋

七⑭かゝる旅ねの月をみるとは 圃

二一⑦かゝる山辺の住居ならては 圃

三三⑧かゝるほどに神無月の廿日あまりの比

かか(掛・懸)《動四》

—り 圃 六⑬かしは原と云所をたちて美濃國関山にもかゝ

りぬ

一〇②やがて夜のうちに二村山にかゝりて山中など

を

—る 圃 四③袂にかゝるはしめ成覽 圃

一三⑤今道と云かたに旅人おほくかゝる間いまはそ
の宿は

二四①いそへによする波の音も身のうへにかゝるや
うにおぼえて

cf. くれー・こえー

かき(垣)《名》

三〇①鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし

cf. かみ——たまー

かきおく(書置)《動四》

—き囀 一⑭心とまるふしぐをかき置てわすれず忍ぶ人

もあらば

かきつく(書付)《動下一》

—け囀 二一⑨歌どもあまた書付たる中に

二二⑩そのかたはらにかきつけし

—く囀 三四①宿の障子に書付

—くる囀 七⑫ある家の障子に書つくるついでに

一九②かきつくるかたみも今はなかりけり 歌

かきつばた(杜若)《名》

一〇⑦在原業平かきつばたの歌よみたりけるに

かきながしがたし(書流難)《形》

—し囀 三三⑨水ぐきのとにもかきながしがたし

かぎり(限)《名》

二⑬けふをかぎりの影ぞかなしき 歌

一八⑬今は限とてのこし置けむかたみさへ

二八⑥かぎりある道なればこの砌をも立出て
かざる(限)《動四》

—ら囀 四⑪飛鳥の河の淵瀬にはかぎりざりけめとおぼゆ

かく(斯)《副》

五⑨かの遺愛寺の辺の草の庵のねざめもかくや有
けむと哀なり

けむと哀なり

二七⑧夜半の旅ねもかくやありけむとおぼゆ

三〇③かくしつゝあかしくらすほどに

かく(書)《動四》

—か困 一八⑪ある家の柱にかゝれたりけりと聞きたれば

—き囀 一④首は霜ににたりと書給へる

九⑤大般若を書て此宮にて供養をとげける願文に

九⑦いまだいくばくならずとかきたるこそ

二四⑭障子に物をかきたるをみれば

二五⑮都良香が富士の山の記に書たり

—け囀 四⑧あしでをかけるやうなり

二⑥無縁の世すて人あるよしをかけり

二⑧浄土の法もんなどをかけり

かく(欠)《動四》

—け囀 二七⑧床のさむしろもかけるばかりなり

かく(欠)《動下一》

—け囀 二〇⑩難行苦行の二の道ともにかけたりといへども

三三⑬文にもくらく武にもかけて

—くる囀 三二①痲繋のそなへかくることなし

かく(掛・懸)(動下二)

一 け 困 二 四 ④磯へに近きたひ枕かけぬ浪にも袖はぬれけり

國

一 け 困 一 七 ⑬ゆふたすきかけてそ頼む今思ふ 國

二 〇 ⑦画像の阿弥陀仏をかけ奉て

二 一 ①をのづから一瓢の器をかけたなりといへり

cf. せき—

かくし(学士)(《名》)

二 二 ⑦学士実政任国に赴く時

かくて(斯)(《副》)

六 ⑦秋風にかくて暫忘れぬれば

かぐら(神楽)(《名》)

み— 三 二 ②陪従をさだめて四季の御かぐらをこたらず

かくる(隠)(《動下二》)

一 れ 困 二 二 ⑫かの志戸と云処にてかくれさせ御座しける御

跡を

かけ(影・陰・蔭)(《名》)

二 一 ④けふをかぎりの影ぞかなしき 國

四 ⑥南山の影をひたさねども青くして洗滌たり

五 ⑤しらぬ翁のかけはみすとも 國

六 ④陰くらき木のしたのいはねより流出る清水

七 ⑨月のかけに筆を染つゝ

八 ⑧木の間より夕日のかけたえだえさし入て

一 一 ⑬柳もいまだ陰とたのむまではなければども

二 二 ⑪道のほとりの往還の陰までも思ひよりに

二 二 ⑬行すゑのかけとたのまむこと

一 三 ②猶その陰を人やたのまん 國

一 四 ⑫月のかけ曇なくさし入たる折しも

一 九 ⑬かた山の松のかけに立よりて

二 三 ⑩漁舟の火のかけは寒くして浪を焼

二 六 ②山のみどり影を浸して空も水もひとつ也

二 六 ⑪影ひたす沼の入えにふしのねの 國

二 六 ⑭松はるかに生わたりてみどりの陰きはもなし

二 八 ⑪巖室石籠の波にのぞめるかけ

三 〇 ⑨出たる月の影のさやけさ 國

cf. こ—・つき—・ひ—・やなぎ—

かけても(掛)(《副》)

二 四 ⑨かけてもおもはざりし旅の空ぞかしなど

かけはし(梯)(《名》)

一 八 ⑥踏かよふ峯の梯とたえして 國

かけまく(懸)(《連語》)

二 八 ③ ゆふたすきかけまくもかしこくおぼゆ

かさ(笠)(《名》)

cf. み—

かさなる(重)(《動四》)

一 ⑩山かさなり江かさなりてはるく遠き旅なれ

一 ⑩山かさなり江かさなりてはるく遠き旅なれ

一 ⑩山かさなり江かさなりてはるく遠き旅なれ

ども

二八⑦岩がねたかくかさなりて胸もなつむばかり也

―れ 圃 二八⑩朱楼紫殿の雲にかさなれる粧ひ

かさぬ(重)《動下二》

―ね 圃 三一⑨行法座をかさね風とこしなへに金磬のひびき

をさそふ

かさばらののはら(笠原野原)《名》

五⑬この宿をいでて笠原の野原うちとをるほどに

かしこし(長)《形》

―く 圃 二八③ゆふだすきかけまくもかしこくおぼゆ

かしはばら(柏原)《名》

六⑬かしは原と云所をたちて美濃国関山にもかゝ

りぬ

かしら(首)《名》

一④首は籍ににたりと書給へる

かず(数)《名》

七⑦照月なみも数みゆばかりすみ渡れり

八⑪驚むらのかずもしらず梢にきるるさま

かすかなり(幽・微)《形動》

―に 圃 二④木綿付鳥かすかにをとづれて

一⑨よもの望かすかにして山なく岡なし

―なる 圃 一⑬或は海辺水流の幽なる砌にいたるごとに

かずならず《連語》

―ぬ 圃 三二⑫つるにすみはつべきよすがもなきかずならぬ

身なれば

かぜ(風)《名》

二⑦風のかぜはげしきをわびつゝぞすぐしける

七②たゝ秋の風とよませ給へる歌おもひ出られて

八⑨木綿四手風にみだれたることがら

一六③不断香の煙風にさそはれうちかほり

二三⑤磯の塩屋ところゝ風にさそはれて煙たなび

けり

二五⑬ふしのねの風にたゝよふ白雲を 圃

三一⑨風とこしなへに金磬のひびきをさそふ

cf. あき―・うら―・おきつ―・しほ―・やま―

かた(方)《名》

一一⑧いかてかあらぬかたに返りし 圃

一二②陝のにしかたを治し時

一三④此みちをば昔よりよくるかたなかりし程に

一三⑤今道と云かたに旅人おほくかゝる間

一六⑬たとふべきかたなきは世にふる道のけはしき

習ひ也

二〇⑩其身堪たるかたなければ

二二⑨都のかたへはせのぼりけるほどに

三〇⑤こしかたに名高く面白き所々にもをとらずお

ぼゆ

三〇⑥さひしきは過こしかたの浦々も 圃

三三④つくづくと都のかたをながめやる折しも

かたがた (方々) (副)

九⑬旅の空のうれへすゞろに催して哀かたぐふ

かし

かたし (難) (形)

cf. あり——・おさへ——・かきながし——・ききわき——

すぎ——・つき——・めぐらし——

かたしきわぶ (片敷佗) (動上)

— び 圍 五⑫かたしきわひぬ床の秋風 歌

かたしく (片敷) (動四)

— き 圍 二五④さゆる夜衣をかたしきて山の雪をおもへる

かたじけなし (辱・忝) (形)

— し 圍 一二⑨此こゝろにや有けんいみじくかたじけなし

かたはら (傍) (名)

二二⑪そのかたはらにかきつけし

二二①道のかたはらの土と成にけりと見ゆるにも

二二⑥かたはらに人なくぞみえける

かたへ (片方) (名)

二二⑦かたへの憤ふかくしてたちまちに

かたみ (形身) (名)

二①をのづから後のかたみにもなれとてなり

八④かのみてのみや人にかたらんとよめる花のか

たみには

九⑩法の形見をたむけをかすは 歌

一〇⑪花ゆへにおちし涙のかたみとや 歌

一八⑭今は限とてのこし置けむかたみさへあとなく

なりにける

一九②かきつくるかたみも今はなかりけり 歌

かたやま (片山) (名)

一九⑫かた山の松のかけに立よりに

かたる (語) (動四)

— ら 圍 八④かのみてのみや人にかたらんとよめる花のか

たみには

— る 圍 一五⑩うちつれたる旅人のかたるをきけば

三一⑫阿弥陀仏の大仏をつくり奉るよしかたる人あ

り

かちはら (梶原) (名)

二二①人にたづぬれば梶原が墓となむこたふ

二二⑤かの梶原は將軍二代の恩に橋り

かつがつ (且且) (副)

七⑩かつく遠情を先途一千里の雲にをくるなど

一一⑭かつくまづ道のしるべとなれるもあはれな

り

かつみ (勝負) (名)

四⑦あしかつみなどおひわたれる中に

かつら (桂) (名)

一五③月のかつらの色にみえにき 歌

かど (門) (名)

二九⑬前は道にむかひて門なし

かなし(悲)(形)

—しき困 二⑭ゆきあふ坂の関水にけふをかきりの影そかな

しき 麴

—しけれ 二①あとなくなりけるこそはかなき世のなら

ひいとゞあはれにかなしけれ

cf. もの—

かなた(彼方)(名)

cf. こなた—

かなふ(叶)(動四)

—ひ 二①鎌倉にて望むことかなひけるによりて

かね(鐘)(名)

五⑧枕にちかきかねの声

三二⑤朧の鐘霜にひゞき楼台の荘嚴よりはじめて

かの(彼)(連語)

一③彼白樂天の身は浮雲に似たり

三⑩かの満誓沙弥が比叡山にて

五⑧かの遺愛寺の辺の草の庵のねさめもかくや有

けむ

六⑧かの西行が道のへに清水なかるゝ柳かけ

八③かのみてのみや人にかたらんと

一〇⑨かの草とおぼしき物はなくて

一二⑤彼木を敬て敢てきらず

一二⑩かの前の司も此召公の跡を追て

一二⑫これを見む輩皆かの召公を忍びけん

一三⑧かの伏見の里ならねども

一六⑩彼巫峡の水の流おもひよせられて

一八⑬かの言のほものこらずと申ものあり

一九⑨かの紅葉みだれてながれけむ竜田川ならねども

も

二〇④かの業平がす行者にことづてしけん程は

二二⑤かの梶原は將軍二代の恩に橋り

二二⑪かの志戸と云処にてかくれさせ御座しける御

跡を

二七①かの千株の松下双峯寺

二七⑧かの縛戎人の夜半の旅ねも

二九④かの源氏物がたりの歌に涙もよほす滝のをと

かなといへる

三二⑤彼東大寺の本尊は聖武天皇の製作金銅十丈余

の

三三⑦かの大仏のなかばよりもすぐめり

かは(川・河)(名)

一六⑧川ふかく流れはげしくみゆ

一六⑩此河みづまされる時ふねなども

一七①此河のはやき流も世中の 麴

cf. あすかの—・おほる—・きく—・くひぜ—・さ

かひ—・たつた—・たに—・とよ—

かはせ(河瀬)(名)

七⑦秋の最中の晴天清き河瀬にうつろひて

—ども 一九⑦一すぢならず流わかれたる川瀬ども
かはばた (川端) (《名》)
七⑥夜更るほどに川端に立出てみれば

かはら (河原) (《名》)

一九⑥遙々とひろき河原の中に

かはりめ (替目) (《名》)

三二⑧金銅木像のかはりめこそあれども

かはりゆく (変行) (《動四》)

—く 困 四⑩かはりゆく世のならひ

かはる (変) (《動四》)

—ら 困 五⑭下くさふかき朝つゆの霜にかはらん行すゑも

六②かはらしな我もとゆひに置箱も 歌

一四⑨行とまる旅ねはいつもかはらねと 歌

三一③崇神のいつくしみ本社にかはらずと聞ゆ

—り 困 八④やうかはりておぼゆ

三〇②旅店の都にことなるさまかはりて心すこし

かひ (甲斐) (《名》)

—る 困 一四②きゝわたりしかひありてけしきいと心すこし

かひなし (形)

—き 困 二四⑧いそぐ塩干のつたひみちかひなき心ちして

かふ (変) (《動下二》)

—へ 困 八⑨あけの玉垣色をかへたるに

cf. ひき—

かへて (楓) (《名》)

二〇③つたかえではしげりてむかしのあとたえず

かへる (帰・返) (《動四》)

—ら 困 九⑥古郷にかへらんとする期いまだいくばくなら

ずと

—り 困 九⑨思ひ出のなくてや人のかへらまし 歌

九③夷をたいらげて帰りに給ふ時

一一⑧いかてかあらぬかたに返りし 歌

二八②たちまちに縁にかへりけるあら人神の

三二⑬帰べきほどとおもひしもむなしく過行て

三三⑥かへるへき春をたのむの雁かねも 歌

三三⑨はからざるにとみの事ありて都へかへるべき
になりぬ

—る 困 八⑥徒ならてかへる家つと 歌

三三⑪故郷にかへるよろこびは朱買臣にあひにたる
こゝちす

三三⑫故郷へ帰る山ちのこからしに 歌

かまくら (鎌倉) (《名》)

—る 困 一⑫終に十余の日数をへて鎌倉に下り着きし間

一五⑫一とせ望むことありて鎌倉へくだる筑紫人有
けり

一六①鎌倉にて望むことかなひけるによりて

二九⑧此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた

三〇⑩抑かまくらのはじめを申せば

三三⑭すでに鎌倉をたちて都へおもむくに
 かまへ(構)《名》

三二⑤堂は又十二楼のかまへ望むにたかし

かみ(神)《名》

一七⑭ことのまゝなる神のしるしを 國

二八⑤又あまくたる神その神 國

二八⑤又あまくたる神その神 國

二九①深きめくみを神にまかせて 國

cf. あらひと

かみ(守)《名》

九⑤長保のすゑにあたりて当国の守にて下りける

に

一〇⑬源義種が此国のかみにてくだりける時

cf. いよの

かみがき(神垣)《名》

八⑦神垣のあたりちかければ

かみさびわたる(神渡)《動四》

一れ⑨ 二七⑬庭の気色も神さびわたれり

かみさぶ(神)《動上二》

一び⑩物にふれて神さびたる中にも

かも(鴨)《名》

四⑧をしかものうちむれてとびちがふさま

かやうなり(新様)《形動》

かやう⑩⑥たちとまりつれとよめるもかやうの所にや

三三⑩かやうのことどもを見聞にも

かやつ(萱津)《名》

八①かやつの東宿の前を過れば

かや(萱屋)《名》

七①萱屋の板疵年経にけりとみゆるにも

かよふ(適)《動四》

cf. ふみ

から(唐)《名》

二三⑩駅路の鈴の声はよる山をすぐと云唐の歌を詠

じければ

からうた(詩)《名》→し

かりう(下流)《名》

一八⑩昔は南陽県の菊水 downstream を汲で歸をのぶ

かりがね(雁音)《名》

三三④一行の雁がね空に消ゆくも哀なり

三三⑥かへるへき春をたのむの雁かねも 國

かりそめなり(仮初)《形動》

一なる⑩一五①かりそめなる草の庵のうちに

かる(借)《動四》

一ら⑨ 五②宿もからまほしく覚えけれども

一り⑨ 一七③爰に宿かりて一日二日とゞまりたるほど

二九⑬あやしの賤が庵をかりてとゞまりぬ

一る⑨ 二五④今富士の山のあたりに宿をかる行客あり

かる(杜)《動下二》

一 れ 圃 二八②あめにはかにふりて枯たる稲葉もたちまちにかれ(彼)《名》

二五⑤かれもこれもともに心すみておぼゆ
二七②一葉の舟中万里身とつくれるに彼も是もはづれず

かれいひ(乾飯)《名》

一〇⑧みな人かれいゐのうへになみだおとしける所よと

かをる(薫)《動四》
一九⑬かれいゐなど取出たるに風冷しく梢にひゞきわたりて

cf. うち—
かん(漢)《名》

三二⑭蘇武が漢を別し十九年の旅の愁

かんこく(函谷)《名》

二④遊子猶残月に行けん函谷の有様おもひいでらる

がんしつ(岩室)《名》

二八⑩巖室石龕の波にのぞめるかけ

かんたう(甘棠)《名》

一二②ひとつの甘棠のもとをしめて政をこなふ時
一二⑦州の民はたとひ甘棠の詠をなすとも忘るゝことなかれ

かんなづきのはつかあまり(神無月廿日余)《名》

三三⑧かゝるほどに神無月の廿日あまりの比
かんなづきはつかあまりみか(十月廿三日)——じふぐやつに
じふさんにち

かんばら(蒲原)《名》

二四⑬神原といふ宿のまへをうちとをるほどに

き

き(木)《名》

一二⑥彼木を敬て敢てきらず

二〇①はそのたのむ木のもと岡へなる 圃

きえゆく(消行)《動四》

一 一 困 三三④一行の雁がね空に消ゆくも哀なり

きかは(吉川)《名》

二二⑨駿河国きかはといふ所にてうたれにけりとき
ゝしが

きき(聞)

cf. よるの—

ききあふ(聞致)《動下二》

一 一 困 一六②聞あへずその御堂へ参りたれば

ききおく(聞置)《動四》

一 一 困 一八②名高き名所なりとは聞きたれども

ききなる(聞馴)《動下二》
一八⑩ある家の柱にかゝれたりけりと聞きたれば

一 一 圃 三三②聞なれし虫の音もやゝよりはりはてて

ききわきがたし(聞分難)(形)

一し田 一四⑤松のひゞき波のをといづれときゝわきがたし

ききわたる(聞渡)(動四)

一り田 一四②きゝわたりしかひありてけしきいと心すごし

きく(聞)(動四)

一き田 六④音にきゝしさが井を見れば

二二⑩駿河国きかはといふ所にてうたれにけりとき

ゝしが

一く田 三⑤大津の宮をつくられけりときくにも

四⑩家居もまばらに成行など聞こそ

一六⑦深き験の有と聞にも 田

一六①底のみくづとなるたぐひ多かりと聞こそ

一七⑩昨日の里の名残をそきく 田

二三⑪民部卿泪をながしけると聞にもあはれなり

二六⑨浮嶋となん名付たりと聞にも

二七⑭此社は伊予の国三嶋大明神をうつし奉ると聞

にも

一け田 三②打出の浜粟津の原なんどきけども

一三③ある者のいふをきけば

一五⑩うちつれたる旅人のかたるをきけば

cf. たづね——み——

きくかは(菊川)(名)

一八⑧此山をもこえつゝ猶過行ほどに菊川といふ所

あり

一八⑪今は東海道の菊川西岸に宿して命をうしなふ

と

一九④菊川をわたりていくほどもなく一村の里あり

きくすい(菊水)(名)

一八⑩昔は南陽県の菊水 downstream を汲で齡をのぶ

きこゆ(聞)(動下二)

一え田 一八⑨中御門中納言宗行と聞えし人の罪ありて

三〇⑩故右大將家と聞え給ふ

一ゆ田 八⑫暮行まゝにしづまり行声こゑも心すごく聞ゆ

一三⑬谷河のながれ落て岩瀬の波ことごとくしくきこ

ゆ

三一④崇神のいつくしみ本社にかはらずと聞ゆ

一ゆる田 二⑭けふをかぎりの影ぞかなしきときこゆるこそ

一三⑫參河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり

一七⑪ことまゝと聞ゆる社おはします

二九⑩大磯江嶋もろこしが原など聞ゆる所々をも

三一⑦大御堂ときこゆるは石巖のきびしきをきりて

一ゆれ田 九⑦哀に心ほそく聞ゆれ

三二⑥天竺震旦にもたぐひなき仏像とこそきこゆれ

きし(岸)(名)

一四④北には湖水有人家岸につらなれり

一六⑩往還の旅人たやすくむかひの岸につきがたし

きしゅうのくわん(祇宗観)

三一⑨月をのづから祇宗の観をとぶらひ

きた(北)《名》

四④北には里人住家をしめ南には池のおもて遠く
見えわたる

一四③北には湖水有人家岸につらなれり

一七⑤北には長松の風心をいたましむ

一八②北は深山にて松杉風はげしく

二六①北はふじの麓にて西東へはるくとながき沼

あり

きたみなみ(北南)《名》

一五⑤北南は眇々とはるかにして

きたる(来)《動四》

一り圃 一六⑨秋の水みなぎり来て舟のさること速なれば

きのふ(昨日)《名》

一七⑥昨日のめうつりなからずは

一七⑩昨日の里の名残をそきく 圃

きは(際)《名》

二六⑭松はるかに生わたりてみどりの陰きはもなし

きはまりなし(形)

一き困 一⑫しばしば前途の極なきにすむ

きびし(厳)《形》

一しく圃 一四④松きびしく生つぎ嵐しきりにむせぶ

一しき困 三二⑦石巖のきびしきをきりて

ぎへい(義兵)《名》

三〇⑫義兵をあげて朝敵をなびかすより

きみ(君)《名》

二二⑬よしや君昔の玉の床とても 圃

一ども 一四⑬君どもあまたみえし中に

ぎやうぼう(行法)《名》

三一⑨月をのづから祇宗の観をとぶらひ行法座をか

さね

きよいう(許由)《名》

二〇⑭許由が潁水の月にすみし

きよくほ(極浦)《名》

一七⑤南には極浦の波袖を湿し

きよし(清)《形》

一き困 七⑦秋の最中の晴天清き河瀬にうつろひて

きよしう(漁舟)《名》

一四③漁舟波にうかぶ

きよじん(漁人)《名》

二三⑨漁舟の火のかげは寒くして浪を焼

きよせい(御製)《名》

一一⑧おほくの年の風月の遊びといふ御製をたまは

せたりけるも

きよはらのしげふぢ(清原滋藤)《名》

二三⑧清原滋藤といふ者民部卿にともなひて

きよみがせき(清見関)《名》

二三④清見が関も過うくてしばしやすらへば

きよみがた (清見瀉) (名)

二三⑫ 清見かた関とはしらて行人も 歌

二四⑬ 清見かた磯へに近きたひ枕 歌

きり (霧) (名)

一⑪ 雲をしのぎ霧を分つゝ

cf. あき—

きる (切) (動四)

一 困 一 二⑥ 彼木を敬て敢てきらすうたをなんつくりけり

一 困 三 一⑦ 石巖のきびしきをきりて

きる (着) (動上一)

き困 三 三⑩ おもはぬほかの錦をやきむ 歌

きる困 三 三⑩ 綿をきるさかひはもとよりのぞむ処にあらね

とも

きるる (来居) (動上一)

一 ある困 八⑪ ねぐらあらそふ鷺むらのかずもしらず梢にきる

るさま

きんくわ (綿花) (名)

一 五⑥ 錦花繡草のたくひはいともみえず

きんけい (金幣) (名)

三 一⑨ 風とこしなへに金幣のひらきをみそふ

きんちやう (金張) (名)

一 ⑤ もとより金帳七葉のさかへをこのます

く

く (来) (動カ変)

二 困 三 〇⑤ こしかたに名高く面白き所々にもをとらず

き困 一 四① 音もたかしの山にきにけり 歌

一 五⑤ まひぎはの原と云所に来にけり

cf. ながれ—すぎ—

く (接尾)

cf. いは—ま—

くきがさき (岫崎) (名)

二 四⑥ くきが崎と云なるあら磯の岩のはざまを

くさ (草) (名)

一 〇⑨ かの草とおほしき物はなくて

一 一⑩ こゝちして草土ともに蒼茫たり

二 二③ 年々に春の草のみ生たりといへる

cf. した—

くさなぎ (草薙) (名)

九 ② 此宮の本体は草薙と号し奉る

くさのいほり (草庵) (名)

五 ⑨ 遺愛寺の辺の草の庵のねざめ

一 五⑧ あやしの草の庵所々みゆる

一 五⑪ かりそめなる草の庵のうちに

二 〇⑦ わづかなる草の庵のうちに

くさのはら (草原) (名)

三⑭草の原露しげくして

くさのまくら (草枕) (名)

二四⑤草の枕のまろぶしなれば

くず (葛) (名)

一一⑦葛のはのいかてかあらぬかたに返りし 囃

ぐせい (弘誓) (名)

一六④弘誓のふかき事うみのごとしと

くだりつく (下着) (動四)

一き 囃 一⑫鎌倉に下り着きし間

二九⑨暮かゝるほどに下りつきぬれば

くだる (下) (動四)

一ら 囃 一八⑨罪ありて東へくだられけるに

一り 囃 九⑤当国の守にて下りけるに

一〇⑬此国のかみにてくだりける時とまりける女の
もとに

一る 囃 一五⑬鎌倉へくだる筑紫入有けり

cf. あま

くちある (朽荒) (動下二)

一れ 囃 一五⑪御堂など朽あれにけるにや

くちずさむ (口遊) (動四)

一み 囃 二二②頭基中納言の口ずさみ給へりけん

くつがへる (覆) (動四)

一り 囃 一六⑩をのづからくつがへりて底のみくづとなる

くに (国) (名)

一〇⑬源義種が此国のかみにてくだりける

一一④燕と云国をつかさどりき

二〇⑨わが身はもと此国のものなり

cf. いづもの——いよの——するがの——とほたふみ
の——みかはの——みのの——やまとの——を
はりの——

くにたみ (国民) (名)

二二⑤国民挙りて其徳政を忍ぶ故に

くにのたみ (国民) (名)

一二⑫国の民のごとくにおしみそだてて

くはふ (加) (動下二)

一ふる 囃 三⑨権化力をくはふるかとなりがたくおぼゆ

くひげがは (株瀬川) (名)

七⑥くひげ川と云所にとまりて

七⑩三日株瀬川に宿して一宵

くぶ (焼) (動下二)

一ふる 囃 二②柴折くぶるなぐさめまでも

くむ (汲) (動四)

一ん 囃 一八⑩昔は南陽県の菊水 downstream を汲で齡をのぶ

くも (雲) (名)

一⑪雲をしのぎ霧を分つゝ

七⑪遠情を先途一千里の雲にをくる

一四⑦朝たつ雲の名残りづくよりも心ほそし

一八④谷より嶺にうつるみち雲に分入心地して

一八⑦雲にあとふ佐夜の中山 〔歌〕

二〇⑭首陽の雲に入て猶三春の朧をとり

二一④心を淨域の雲の外にすませる

二六④雲の波煙の浪いとふかきながめなり

二六⑫ふしのねの煙も雲も浮嶋かはら 〔歌〕

二八⑩朱楼紫殿の雲にかさなれる粧ひ

三二③③半天の雲にいり白毫あらたにみがきて

cf. うき——しら——

くもりなし 〔形〕

——く 困 一四⑫月のかげ曇なくさし入たる折しも

くやう 〔供養〕 〔名〕

九⑤此宮にて供養をとげける願文に

くらし 〔暗〕 〔形〕

——く 困 二〇⑩観ずるに心くらく仏を念ずるに

三二⑫文にもくらく武にもかけて

——き 困 六④陰くらき木のしたのいはねより流出る清水

cf. こ——

くらす 〔暮〕 〔動四〕

cf. あかし——

くらぶ 〔比〕 〔動下二〕

——ぶれ 困 一六⑬人の心にくらぶればしづかなる流ぞかしと

くる 〔暮〕 〔動下二〕

cf. ゆき——

くるし 〔苦〕 〔形〕

——しき 困 一〇①いそく汐干の道そくるしき 〔歌〕

くるまがへし 〔車返〕 〔名〕

二七⑥車返しと云里あり

くれかかる 〔暮掛〕 〔動四〕

——る 困 二九⑫暮かゝるほどに下りつきぬれば

くれゆく 〔暮行〕 〔動四〕

——く 困 八⑫暮行まゝにしづまり行声ごゑも心すぐく聞ゆ

くわいこ 〔懷古〕 〔名〕

三三③懷古のこゝろに催されて

くわうきよ 〔皇居〕 〔名〕

三⑤此ほどはふるき皇居の跡ぞかし

くわうやうたり 〔混養〕 〔形動〕

——たり 困 四⑦南山の影をひたさねども青くして混養たり

ぐわぎう 〔画像〕 〔名〕

二〇⑦画像の阿弥陀仏をかけ奉て

くわらく 〔花落〕 〔名〕

七⑨筆を染つゝ花落を出て三日

くわん 〔観〕 〔名〕

cf. ぎしゅうの——

くわんおん 〔観音〕 〔名〕

一五⑩此原に木像の観音おはします

一五⑬此観音の御前にまいたりたりけるが

くわんぎよ 〔還御〕 〔名〕

二⑫石山に詣て還御ありけるに

ぐわんしょ (願書) (名)

一六④願書とおぼしき物計帳の紐に

くわんず (観) (動サ変)

―ずる困二〇⑩理を観するに心くらく

くわんとう (関東) (名)

三二①関東のたかきいやしきをすすめて

ぐわんもん (願文) (名)

九⑥供養をとげける願文に

ぐんかん (軍監) (名)

二三⑨軍監と云つかさにて行けるが

け

けいかう (景行) (名)

九②景行の御子日本武尊と申

けいかうてんわう (景行天皇) (名)

八⑭其後景行天皇の御代に

けいちやう (計帳) (「斗帳」の誤写カ)

一六④計帳の紐に結びつけたれば

けさ (今朝) (名)

二四⑩沖津風けさあら磯の岩つたひ 歌

三四②なれぬれは都を急ぐ今朝なれと 歌

けしき (気色) (名)

一四②きくわたりしかひありてけしきいと心すごし

二七⑬庭の気色も神さびわたれり

けだかし (気高) (形)

―く困 二八⑨権現垂跡のもとるけたかくたふとし

けはし (険) (形)

―しき困一六⑭世にふる道のけはしき習ひ也

けはひ (気色・気配) (名)

一四⑬すこしおとなびたるけはひにて

けふ (今日) (名)

二⑬けふをかきりの影ぞかなしき 歌

四②朝露けふやさは袂にかゝるはしめ成覧 歌

五④たちよらてけふは過なん鏡山 歌

八②けふは市の日になむあたりたる

けぶり (煙) (名)

一六③不断香の煙風にさそはれうちかほり

二一②殊更煙たてたるよすがもみえず

二三⑤風にさそはれて煙たなびけり

二六④雲の波煙の浪いとふかきながめなり

二六⑦塩屋の煙たえく立わたりて

二六⑫ふしのねの煙も雲も浮嶋かはら 歌

げんじものがたり (源氏物語) (名)

二九④かの源氏物がたりの歌に

こ (胡) (名)

三三①李陵が胡にいりし三千里のみちの

こ(期)《名》

九⑦古郷にかへらんとする期

こ(功)《名》

三二②その功すでに三か二をよぶ

三三④両三年の功すみやかに

こうだいしゅうけ(故右大將家)《名》

三〇⑩故右大將家と聞え給ふ

こえかか(越掛)《動四》

一る 困 一三⑫山中にこえかゝるほどに

こえず(越過)《動上二》

一ぐる 困 一〇②山中などをこえ過るほどに東漸しらみて

一一②みやち山こえ過るほどに赤坂と云宿あり

こえはつ(越果)《動下二》

一て 困 七①こえはてぬれば不破の関屋なり

こえおる(越下)《動上二》

一り 困 二九②此山もこえおりて湯本と云所にとまり

こかけ(木陰)《名》

六①道のへの木陰の清水むすふとて 歌

二一⑭ある木陰に石をたかくつみあげて

こがらし(木枯)《名》

三三⑩故郷へ帰る山ちのこがらしに 歌

こぎゃうこくせしゅうどの(後京極摂政殿)《名》

七②後京極摂政殿の……とよませ給へる歌

こまめく(漕行)《動四》

一く 困

三①漕行舟のあとのしら波誠にはかなく心ぼそし

三②世中を漕行舟によそへつゝ 歌

こきんしふ(古今集)《名》

こぐらし(木暗)《形》

一く 困 二七⑬松の嵐木ぐらくをとづれて

こ(爰)《名》

七④爰をばむなしうち過ぬ

一一③こゝにありける女ゆへに

一七③爰に宿かりて一日二日とゞまりたる

二一⑨東路はこゝをせにせん宇津の山 歌

二二⑫我も又こゝを世にせんうつの山 歌

二二⑮心ある旅人はこゝにもなみだをやおとすらむ

二二⑯さはこゝにて有けるよと哀に思ひあはせらる

二五⑥呀る夜に誰こゝにしもふしわひて 歌

こ(心地)《名》

五⑧いつしか引かへたるこゝちす

一一⑩見たららんこゝちして

一六⑫おもひよせられていと危き心ちすれ

一八④雲に分入心地して

二四⑧かひなき心ちして

三三②三千里のみちの思ひ身にしらるる心ちす

三三⑩朱買臣にあひにたるこゝちす

こ(つ)のよ(九世)《名》

三〇〇 水の尾の御門の九の世のはつえを
こころ(心)《名》

- 一〇 心は隠遁にあるいはれなり
- 一四 心とまるふしつゝをかき置て
- 二〇 常は琵琶をひきて心をすまし
- 二一 あたり迄心をとむる相坂の関 歌
- 七 古人の心遠く思ひやられて
- 一五 まよひの心をしもしるべとし
- 二二 此こころにや有けん
- 一四 行人心をいたましめ
- 一五 心のうちに申置て侍りけり
- 一六 人の心にくらぶれば
- 一七 人の心のたくひとは見す 歌
- 一七 北には長松の風心をいたましむ
- 一七 是も心とまらずしもあらざらまし
- 二〇 理を観するに心くらく仏を念するに性ものうし
- 二一 心を浄域の雲の外にすませる
- 二一 世をいとふ心のおくや濁らまし 歌
- 二一 心とまりておぼゆれば
- 二三 心計はとゝめをくらむ 歌
- 二五 これもともに心すみておぼゆ
- 二九 こそぐ心にのみすゝめられて
- 三一 殊に心とまりてみゆ

三二 心とまらずしもはなれけれども

三三 懐古のこころに催されて

三三 其こころのうち水ぐきのあとにもかきながし
がたし

おん一 二 四 いかなりける御心のうちにかと

こころあり(心在)《動ラ変》

一 四 二 五 心ありけるたび人のしわざにや

一 五 二 二 心ある旅人はこゝにもなみだをやおとすらむ

こころす(心)《動サ変》

一 一 四 二 〇 岡へなる松の風に心してふけ 歌

こころすこし(心凄)《形》

一 一 四 八 声ごゑも心すこく聞ゆ

一 一 四 四 けしきいと心すこし

三〇 二 旅店の都にことなるさまかはりて心すこし

こころならず《連語》

一 一 四 二 九 うち過ぬることいと心ならずおぼゆれ

こころにくし(心憎)《形》

一 一 四 四 詠じたりしこそ心にくくおぼえしか

一 一 四 二 一 中々あはれに心にくし

こころほそし(心細)《形》

一 一 四 九 七 かきたるこそ哀に心ほそく聞ゆれ

一 一 四 三 一 一 波誠にはかなく心ほそし

七 一 木の下道あはれに心ほそし

一 四 八 名残いづくよりも心ほそし

一八②聞をきたれどもみるにいよ／＼心ほそし
二四⑩打ながめられつゝいと心ほそし
二六⑦眺望いづれもとり／＼に心ほそし

一けれ^四 三①いかなる御心のうちにかと哀に心ほそけれ

こざん(孤山)《名》

二二③身を孤山の嵐の底にやどして

こさんでうてんわう(後三条天皇)《名》

一二⑥後三条天皇東宮にておはしましけるに

こじん(故人)《名》

七⑧二千里の外の古人の心遠く思ひやられて

こすい(湖水)《名》

一四③北には湖水有人家岸につらなれり

こず系(梢)《名》

六⑭山風松の梢に時雨わたりて

八⑪かずもしらず梢にきゐるさま

一五⑦塩かぜ梢に音信又あやしの草の庵所々みゆる

一九⑬嵐冷しく梢にひゞきわたりて

二六⑦浦かぜ松の梢にむせぶ

こぞる(拳)《動四》

一り^四 一二⑤国民拳りて其徳政を忍ぶ故に

こたう(孤嶋)《名》

二六⑤すべて孤嶋の眼に遮るなし

こたふ(答)《動下一》

一ふ^四 二〇⑭年月をくるよしをこたふ

一ふ^四 二二①人たつめれば梶原が墓となむこたふ
こたぢ(木立)《名》

八⑧木立年ふりたる杜の木の間より

こと(事)《名》

一①なすことなくして徒にあかしくらす

一⑩都を出て東へ赴く事あり

五②此山の事にやとおぼえて

六⑧立さらん事はものうくて

一二⑧詠をなすとも忘るゝことなかれ

一二⑬行すゑのかけとたのまむこと

一三⑦さだまれることといひながら

一四⑥夢をさまさずといふ事なし

一五⑫一とせ望むことありて鎌倉へくだる

一六①鎌倉にて望むことかなひけるに

一六④弘誓のふかき事うみのごとし

一六⑨舟のさること速なれば

一七⑭今思ふことのまゝなる神のしるしを 𠬞

二二⑦いかなることにありけん

二二⑬しもぎまのものは申にをよばねども

三二②蘋蘩のそなへかくることなし

三二⑭事のおこりをたづぬるに

三三⑧はからざるにとみの事ありて

三三⑫かやうのことどもを見聞にも

一ども

こと(每)《接尾》

一〇 水流の幽なる砌にいたることに

八 往還のたぐひ手毎にむなしからぬ

ことから (事柄) (名)

八 木綿四手風にみだれたることから

ことごとし (事) (形)

一 しく 困 一三 岩瀬の波ごとくしくきこゆ

ことさら (殊更) (副)

二 二 此庵のあたりには殊更煙たてたる

ことつて (言伝) (名)

二〇 四 かの業平がす行者にことつてしけん

ことなり (異) (形動)

一 に 困 二七 夜のやどりありかことにして

一 なる 困 三〇 一 旅店の都にことなるさまかはりて

ことに (殊) (副)

三一 五 二階堂はことにすぐれたる寺也

三一 六 ありとにいたるまで殊に心とまりてみゆ

ことのは (言葉) (名)

七 四 いやしきことの葉をのこさんも

一 五 二 言のはの深き情は軒端もる月のかつらの

ことのみ (事任) (名)

一 八 九 かの言のはものこらずと申

一 七 一〇 ことのまゝと聞ゆる社おはします

ことわり (理) (名)

一 二 七 一〇 ことのまゝなる神のしるしを

二〇 理を観ずるに心くらく

ことわる (理) (動四)

一 一 四 あまねく又人の患をことわり

こなたかなた (此方彼方) (名)

二 六 六 こなたかなたの眺望

この (此) (連語)

二 五 此関の辺にわらやの床を結びて

二 八 此関のあたりを四宮河原と名付たり

三 五 此ほどはふるき皇居の跡ぞかし

三 一〇 此海を望つゝよめりけん歌

三 一四 このほどをも行過て野路と云所に

四 九 旅人この宿にこそとまりけるが

五 二 此山の事にやおぼえて

五 一三 この宿をいでて笠原の野原うちとをるほどに

七 三 此うへは風情もめぐらしがたければ

八 一三 ある人のいはく此宮は素盞鳥尊なり

九 一 一の砌に跡をたれ給へりといへり

九 一 一 此宮の本体は草薙と号し奉る

九 五 此宮にて供養をとげける願文に

九 一〇 この宮をたち出浜路におもむくほど

一〇 一三 源義種が此国のかみにてくだりける

一 二 九 此ころにや有けん

一 二 一〇 かの前の司も此召公の跡を追て

一 三 三 此みちをば昔よりよくるかたなかりし程に

- 一四⑪さても此宿に一夜とまりたりしやどあり
 一五④此宿をもち出て行過るほどに
 一五⑩此原に木像の観音おはします
 一五⑬此観音の御前にまいたりたりけるが
 一五⑮もしこの本意をとげて古郷へむかはゞ
 一六⑩此河みづまされる時
 一七①此河のはやき流も世中の人の心の 國
 一八⑧此山をもこえつゝ猶過行ほどに
 一八⑩東へくだられるに此宿にとまりけるが
 一九⑤此里のひがしのはてに
 二〇⑨わが身はもと此國のものなり
 二〇⑬此山に庵を結つゝあまたの年月を
 二一①此庵のあたりには
 二一⑧此庵のあたり幾程遠からず
 二三⑧此関にいたりてとどまりけるが
 二三⑭この関遠からぬほどに興津といふ浦あり
 二六④此原昔は海の上にかびて
 二六⑬やがて此原につきて千本の松原といふ所あり
 二七⑬此社は伊予の国三嶋大明神をうつし奉ると
 二八⑤又あまくたる神ぞこの神 國
 二八⑥この砌をも立出て猶ゆきすぐるほどに
 二九②此山もこえおりに湯本と云所に
 二九⑧此宿をもたちて鎌倉につく日の夕つかた
 三〇⑬營館をこの所にしめ

三三⑥此阿弥陀は八丈の御長なれば
 cf. これぞ——

このかた(以来)《名》

三〇⑭仏神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた

このした(木下)《名》

六④陰くらき木のしたのいはねより

このしたみち(木下道)《名》

六⑭日影もみえぬ木の下道あはれに心ぼそし

このは(木葉)《名》

二七①木のはのうけるやうにみゆ

このま(木間)《名》

八⑧杜の木の間より夕日のかけたえだえさし入て

このむ(好)《動四》

—ま困 一⑤金帳七葉のさかへをこのまず

こはま《名》

一九④一村の里ありこはまとぞいふなる

こひし(恋)《形》

—し困 一〇⑭三河の八はしを恋しとのみや思ひわたらん

國

—しき困三⑬日ふるまゝにはたゞ都のみぞこひしき

こぶ(国府)《名》

一七③遠江の国府いまの浦につきぬ

二七⑫伊豆の国府にいたりぬれば

こぶね(小舟)《名》

一七④あまの小舟に棹さしつゝ

こほり(郡)《名》

cf. しがのー

こま(駒)《名》

二②駒引わたる望月の比も漸近き空なれば

一三⑭岩つたひ駒うち渡す谷川の 歌

二八⑦駒もなづむばかり也

こむさしのせんじ(故武藏前司)《名》

一一⑫古武藏の前司道のたよりの輩に仰て

こゆ(越)《動下二》

一え圃一八⑧此山をもこえつゝ猶過行ほどに

一ゆれ圃二〇③宇津の山をこゆればつたかえではしげりて

こよひ(今宵)《名》

五⑪都出ていくかもあらぬこよひたに 歌

七⑬秋の半の今宵しも……月をみんとは 歌

二四⑤こよひはさらにまどろむ間だになかりつる

こよなし《形》

一う圃二五⑩絵の山よりもこよなうみゆ

こりう(五柳)《名》

cf. たうせんー

これ(是)《名》

一⑧是即身は朝市にありて

八⑭大和言葉も是よりはじまりけり

一一⑫これを見む輩皆かの召公を忍びけん

一七⑦是も心とまらずしもあらざらまし

二二③是も又ふるきつかとなりなば

二三⑦是をたひらげんために

二五⑤かれもこれもともに心すみておぼゆ

二七②彼も是もはづれず

三一⑪蓬の寺まぢまぢにこれおほし

三二⑧末代にとりてはこれも不思議といひつべし

これぞこの(是此)《連語》

二〇①是ぞこのたのむ木のもと 歌

二七⑩是ぞこのつりする海士の舌庇 歌

ころ(比・頃)《名》

一⑨八月十日あまりの比都を出て

二③望月の比も漸近き空なれば

一五⑩いつのころよとはしらず

一八⑨去にし承久三年の秋の比

二五⑩貞観十七年の冬の比白衣の美女二人ありて

三二①過にし延応の比より

三三⑧神無月の廿日あまりの比

cf. ちかー

ころも(衣)《名》

二五④さゆる夜衣をかたしきて山の雪をおもへる

cf. たびー・なみわけー

こゑ(声)《名》

五⑧枕にちかきかねの声曉の空にとづれて

二三⑩ 駅路の鈴の声はよる山をすぐと云

三〇① 鹿の音虫の声かきのうへにいそがはし

こえこゑ (声々) (名)

八⑫ しつまり行声こゑも心すこく聞ゆ

こんげ (権化) (名)

三二⑨ 権化力をくはふるかとありがたくおぼゆ

こんげん (権現) (名)

二八⑧ 権現垂跡のもとのけだかく

こんどう (金銅) (名)

三二⑤ 金銅十丈余の廬舎那仏なり

三二⑦ 金銅木像のかはりめこそあれども

水

ざ (座) (名)

三二⑨ 行法座をかさね

ざいぎやう (西行) (名)

六⑧ かの西行が道のへに……とよめるも

二二⑫ 西行修行のついでにみまいらせて

ざうばうたり (蒼茫) (形動)

一たり四二⑩ 草土ともに蒼茫たり

さか (坂) (名)

二⑬ あまたゝびゆきあふ坂の関水に 関

さかえ (栄) (名)

一⑤ 金帳七葉のさかへをこのまず

さかひ (境) (名)

一三⑫ 参河遠江のさかひに高師の山と聞ゆるあり

三三⑩ 錦をきるさかひはもとより

さかひがは (境川) (名)

一三⑬ 岩瀬の波ことくしくきこゆ境川とぞ云

さき (崎) (名)

cf. くきが——す——みうらが——

さきのつかさ (前司) (名)

二二⑩ かの前の司も此召公の跡を追て

さきむら (鷲叢) (名)

八⑩ ねぐらあらそふ鷲むらのかずも

さざなみ (小波) (名)

三⑦ さゝ波や大津の宮のあれしより 関

ささはら (笹原) (名)

一一⑪ さゝ原の中にあまたふみわけたる道ありて

さしあたりて (副)

二二① さしあたりてみるにはいと哀におぼゆ

さしいづ (差出) (動下二)

一で四 一四④ 洲崎遠くさし出て松きびしく生つゞき

さしいる (差入) (動四)

一り四 八⑨ 杜の間より夕日のかげたえだえさし入て

一四⑫ 月のかげ曇なくさし入たる折しも

さして (副)

一一② さしていづこに住はつべしとも……さだめぬ